

報 告 編

本編には、本計画研究とも関連が深い D01- 公募班「中世北東アジア考古遺跡データベース作成を基盤とする歴史学と考古学の融合」（代表：村岡 倫）の調査報告 2 本（村岡・松田報文）を併せて掲載した。班の詳細については村岡報文を参照されたい。

ロシア沿海地方金・東夏代城址遺跡の調査

木山克彦・布施和洋

はじめに

本研究では、10～13世紀に日本海対岸地域である中国東北部・ロシア極東で活発に活動した女真族の社会を明らかにすることを目的の一つとしている。特に女真族が遺した土城遺跡には、豊富な考古資料が内包されており、彼等の行政制度や生産・流通の様相を明らかにするために有効な資料である。ロシア・中国においても遺跡の確認から発掘・測量などの調査がすすめられている。しかし、遺跡自体が大型であることに加え、地形図等の使用が困難なことから、ほとんどの遺跡について、位置や地理的環境などの詳細が明らかにされていない。そのため、本研究では各遺跡の地理情報を収集し、情報の管理・分析を可能にするための遺跡地理情報システム（GIS）の構築を目指している。そのため、現地での具体的な作業として、土城遺跡の測量やGPSを用いた位置測定を必要とする。平成15年度は、視察を中心とした予備的な調査を行い対象地を検討し、海外研究協力者であるY. ニキーチン氏らと協議を行った結果、平成16年度に、沿海地方中部で測量調査を実施することとなった。調査は、平成16年10月21日～11月4日に実施した。当調査の体制は以下の通りである。

調査体制

日本側参加者

白杵 勲（札幌学院大学人文学部助教授）

小畑 弘己（熊本大学文学部助教授）

木山 克彦（北海道大学大学院大学院生）

布施 和洋（北海道大学研究生）

ロシア側参加者

Yu. G. ニキーチン（Ю. Г. Никитин；ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史・考古・民族研究所）

N. N. クラージン（Н. Н. Крадин；同上）

1. 調査の経過

10月21日 白杵、小畑、木山、布施の4名は新潟空港より飛び立ち、ウラジオストック空港に定刻通りの18時（ロシア時間）に到着。空港でニキーチン、クラージン氏と合流し、ウラジオストック市街地へ向かう。夕食をとりながら簡単な打ち合わせを行う。ウラジオストック泊。

10月22日 ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史・考古・民族学研究所（以下、アカデミーと略す）で、ノヴォパクロフカ2城址から出土した資料の観察を行う。合わせて、踏査を予定している他の土城についても調査報告書を閲覧、記録させてもらい、ニキーチン氏等から調査概要の説明を受ける。その後、明日以降の調査の打ち合わせをし、必要な資材、食料品の調達と準備を行う。ウラジオストック泊。

10月23日 朝8時頃、最初の目的地であるオトラドノエ1城址に向け出発。ウラジオストックより東に向かい、アルチョーム周辺でアレテモフスカ川に沿って北へ向かう。同川を遡り、イリスタヤ川の支流であるオトラドノヤ川に沿って進む。イリスタヤ川とオトラドノエ川の合流点にあるオトラ

ドノエ村で軽食をとる。午後からオトラドノエ 1 城址で GPS による計測を行う。その後、イリスタヤ川に沿って北上し、ニコラエフカ 1 城址を調査する。また、同遺跡から北のニコラエフカ 2 城址を視察する。オトラドノエ村泊。

10 月 24 日 朝、オトラドノエ村を出てイワノフカ村で東に曲がり、アルセニエフカ川流域に出る。アヌーチノ市到着後、午前中にアヌーチノ城址の調査を行う。午後にはアルセニエフカ川を北上し、アヌーチノ市より北東約 10km にあるノヴォゴロデフカ城址と同遺跡の川向いにあるシクリャエフスコエ城址を調査する。アルセニエフ市泊。

10 月 25 日 アルセニエフ市より東に向いウスリー川流域に出る。午前中にチュグエフカ城址、午後からウスリー川の支流パブロフカ川流域に向かい、パブロフカ城址を調査する。シュムニー村泊。

10 月 26 日 シュムニー村を出発し、再びウスリー川流域に出る。同川を北上し、午前中、コクシャロフカ 1 城址、同 2 城址を踏査する。コクシャロフカ 2 城址の踏査終了時に小雪が舞う。軽食を取った後、ノヴォパクロフカ村に向けて出発する。夕方、同村に到着する。

10 月 27 日～10 月 31 日 ノヴォパクロフカ 2 城址の測量調査を行う。同遺跡調査期間中は、ノヴォパクロフカ郊外に宿泊。

11 月 1 日 ウラジオストックに向け出発。帰路は、ノヴォパクロフカ村よりイマン川沿いに西走し、ダリネレチェンスク市を過ぎて後は中国国境線沿いの幹線道路を南下する。途中、ゴルバトカ城址の踏査を行う。またウスリースク市に立ち寄り、ユジノウスリースク城址の残壁を観察する。また、同市内の公園に展示されている完顔忠神道碑の亀扶を見学した後、同市郊外のクラスノヤロフスコエ土城を視察する。19 時頃、ウラジオストックに到着。

11 月 2 日 研究所にてノヴォパクロフカ 2 城址から出土した遺物の資料化を行う。ウラジオストック泊。

11 月 3 日 前日に引き続き、ノヴォパクロフカ 2 城址の出土遺物の資料化を進める。午後から、ウラジオストック博物館とアルセニエフ博物館の展示資料を見学する。ウラジオストック泊。

11 月 4 日 ロシア時間 14 時に新潟に向け、ウラジオストック空港を飛び立つ。日本時間 15 時に新潟着。平成 16 年のロシア沿海州における現地調査を終了、解散する。

2. 調査の方法

(1) 3 次元測量調査の先行事例

近年、情報処理技術の進歩により、3 次元的な測量が研究機関や行政で実践されつつあり成果を挙げている。三次元測量方法としては写真測量系と器械測量系に分類でき、それぞれ三次元測量の技術的研究が進められている。近年、レバノン共和国ティール市ラマリ遺跡では発掘調査と並行して、3 D プロファイラスキャニングデータによる遺構の実測が行われ¹⁾ ている。ラストイメージ化された点群の 3 D データトレースにより 3 D イメージが復元され、3 D プロファイラのスキャニングデータから 2 D の実測図も作成された。しかし、実測図としての精度は高いが、遺構と地図のリンクができず、図面上に座標値を与えられないという問題がある。

そこで本調査では土城に地理座標値を与え、様々なデジタル地図と重ねて活用することを可能にするために、GIS²⁾ (地理情報システム) ソフト Arc view、GPS (全地球測位システム)、電子コンパス、レーザーレンジファインダーを用いて測量を試みた³⁾。GPS を用いた測量調査としては奈良大学・国土舘大学イラク古代文化研究所・西アジア考古学会によるレバノン共和国、ティール遺跡の例があり、周辺の遺跡踏査におけるディファレンシャル GPS を用いた簡易地図の作成が試みられている⁴⁾。

しかし、GPS、レーザーレンジファインダーを使用し、3次元位置情報を取得して、GIS上で図面の作成を行う試みは行われていない。

(2) GPS・GISを用いた土城⁵⁾の測量

海外調査では、調査地の近隣に緯度経度・標高値が定められた三角点、あるいは電子基準点を利用することは困難な場合が多い。しかし、GPS受信機を用いると、基準点を任意の場所に設定することが可能となる。数年前までGPSは、米国による意図的な精度劣化であるセレクトティブ・アベイラビリティ（SA）が存在したため、誤差が目標点から数十m以上となる場合があり、精度的な問題があった。しかし2000年のSA解除や、GPSの性能の向上により精度が上がり、またディファレンシャルサービス⁶⁾も普及したため、誤差は数m～数cmにまでおさえることが可能になった。

今回調査対象としたロシア沿海地方の土城は外周が数百m～数kmに及ぶ大規模なものである。しかも、沿海地方だけで100基以上の程度の土城が確認されており、それらすべてについて詳細・高精度な測量図を作成するには経費・時間が膨大になってしまう。同様な条件を持つ、日本の中世城郭では「縄張り図」という簡易測量図を作成することにより、多数ある城郭の資料化に成功している。そこで、今回の調査では、縄張り図に近い精度・内容のものを迅速に作成できる方法を検討することを目的とした。土城の規模を考慮すると、数m程度の誤差はあっても、地形や位置関係などの情報は十分活用できるものと考えたわけである。しかし、日本で用いられるような2万5千分の1以上の大縮尺地図がロシアでは使用できないという制限がある。そこでGPSその他の機器とGISを導入することにより測量作業効率の向上を図ったわけである。また、調査の基準となる座標・高度はUTM53N系、と標高値を用いた。標高については、GPSで取得した楕円体高を米国地球空間情報局（National Geospatial Intelligence Agency）が提供する座標変換ソフトであるGeotrans ver2.21を用いて標高に変換した。

GPSによる定点測量

土城にはロシア極東アカデミーが簡易測量図を作成したものがある。2003年度の予備調査時に、これらの図を実際に現地で土城と比較したところ、比較的精度が高いことが確認できた。実際には、コンパスを用いて図を作成したとのことである。そこで、これらの図を活用するために、土城のランドマークとなる土塁・堀の角等の顕著な変化点を測量地点として選定し図上に記録し、実際にそのポイントでGPS受信器⁷⁾により位置座標を取得した。後に述べるように、この情報を利用して土城の図をGIS内で地図上に置くことが可能となる。

GPS・電子コンパス・レーザーレンジファインダーを用いた土城全面測量

土城周辺に三角点等の基準点が存在しない場合、土城付近にGPSを用いて基準点を設け、測量を始めることができる。ノヴォポクロフカ土城では、土城内部に基準点をGPSで設置し、基準点より電子コンパス・レーザーレンジファインダーで測量する、コンパス測量を行った。この作業には、野外用の地理情報取得ソフトウェアであるESRI社のArc Padを用いた。このソフトでは、画面上での表示移動や縮尺操作も可能であり、測量結果を確認しながら作業を進めることもできる。また、レーザーレンジファインダーは200mまでの距離が測量可能である。電子コンパスは磁針方位が基準となっているが、計測したあるいは地形図に記載された磁気偏角を用いて、UTM座標に整合させることが可能である。レーザーレンジファインダーはトータルステーションよりも精度は落ちるが、基準

点での設置が容易であり、かつ軽量で機動性が高いことから、山間部などでの迅速な簡易測量に優れている。これにより、土城の土塁・馬面・堀・住居址のくぼみ等をライン・ポイントのシェープファイルの形で、測量・記録した。また、土塁内部と土城周辺の等高線を作成するため、土塁内部から土城周辺に至るまでおよそ 1400 ポイントの測量を行った。今回の測量では周長約 2 km の土城について、4 日間で図面作成に必要なデータが取得できた。

(3) 取得データによる測量図の作成

GPS により土塁や堀の変化点を測定した土城については、ESRI 社の地理情報システムソフトウェアの Arc view_Arc Map を用いて測定ポイントを表示した。GIS 上では複数のレイヤを重ねることが可能であるが、全旧ソ連邦地形図 (1 / 20 万) のラスト画像⁸⁾ と SRTM⁹⁾ のオルソ画像、SRTM を基に作成した等高線それぞれ重ね合わせた。またロシア調査隊側が作成した簡易土城測量図に、変化点のポイント情報を利用したジオリファレンスにより座標を与え、おおよその位置に投影した。GIS 上で表示させるため、多様な縮尺で土城そのものや、周辺環境、地形を観察することが可能である。

ノヴォボクロフカ土城については、計測結果を統合した土塁・堀等の遺構全体図を作成し、さらに計測ポイントから等高線を Arc Map 上で作成し、土城内郭および周辺の微地形を再現した。また、これらの空間情報を統合したポリゴンである tin を作成し、Arc Scene 上で 3 次元土城鳥瞰図も作成できた。さらに、上記の地形図等のレイヤ以外に USGS の CORONA 衛星画像を重ね合わせることに成功した。以上の作業から、GIS 上で活用可能な形の測量成果が得られたと考えている。

3. 定点測量・踏査城址の概要

平成 16 年の調査では 10 基の城址の定点測量を実施した。ロシア側の作成した城址のプラン図を既存の地形図、世界高度情報と重ねて GIS での活用を可能にすることを主要な目的に、GPS 受信機を用いて位置測定を行った。具体的な作業は、上記のとおりである。また、いずれの土城についても測定は短時間で終了できたが、その他に表面観察などで、各種の情報も得ることができた。ここでは、それらの観察所見をまとめておく。

オトラドノエ (Отрадное) 1 城址

城址のあるオトラドノエ村は川の両側に急峻な山々が迫る溪谷にある。イリスタヤ川に沿った狭い溪谷はシホテアリヤン山脈方向に向かい、他方、オトラドナヤ川沿いの溪谷は南に延び、アルテムフスカ川流域 (р. Артемовска) の溪谷に繋がって日本海に通じる。城址はイリスタヤ川 (р. Илистая) とオトラドナヤ川 (р. Отрадная) の合流点付近のオトラドナヤ川 (南方向) の左岸に位置する。北側 (イリスタヤ川沿い) と東側 (オトラドナヤ川沿い) が断崖となる山縁上に立地する。南側は山に向かって傾斜が登り、西

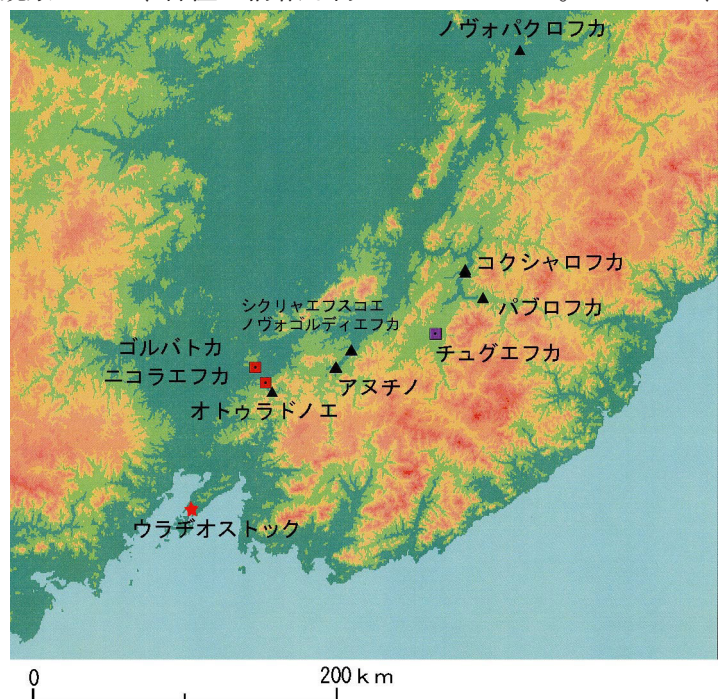


図1 調査城址分布図



写真1 オトラドノエ城址土塁

側は城と同様の高さで山裾が続く。

城址の全形は不整の長方形で、周長は約 800m を測る。城内は山林で、現在、人の居住はない。いずれの面も土塁は低いが、特に東側の断崖に接する壁は最も低く、50～100cm 程の高さしかない。他の面の土塁はやや高く、1～1.5 m 強である。土塁頂部には所々に礫が散布しており、土塁の補強材となったと考えられる。北側土塁の下には塁線に平行して、細い平坦面が築かれている。門は北側と西側にそれぞれ 1 ヶ所ある。いずれも土塁が切れているだけの構造で、付随施設はない。幅 5～6 m である。ボルデン（ボ

ロデイン 1995）によれば、本城址の南西には要塞を持つ複雑な構造の門があるとされているが、今回の調査でははっきりと該当する例が確認できなかった。また南西側土塁の外には楕円状の径 5 m 程の張り出し部があり、土塁と張り出し部の間には堀が切られている。張り出し部は土塁より 1 段低くなっている。西側土塁には南北斜面の傾斜に沿って幅 7 m 程の堀が 2 本並ぶ。この内、土塁側の堀は途中で切れ、幅 1 m 程の土橋が築かれている。先の張り出し部付近では、もう 1 列の堀が築かれており、計 3 列の堀が並ぶ。城址西側は他の面と比べ、城址の内と外の傾斜が弱い為、城の防禦性を高める意味を持っているのだろう。

城址内全体は斜面であるが、比較的傾斜の緩やかなテラスが 3 面あり、階段状を呈する。この内、最も低い南側の平坦面には住居と推定されている浅い落ち込みが認められる。平面形は方形を呈し、径は 4～5m である。ニキーチン氏によれば、このような落ち込みはここで約 200 基認められているという。またこの落ち込みから 10 世紀後半以降に属する土器が採集されており、城址の年代も同様と推定されている。住居址以外、特記すべき施設は確認されていない。

ニコラエフカ（Николаевка）1 城址

オトラドノエ城址より約 10km 北、イリスタヤ川の左岸に位置する。城の付近は、オトラドノエ村周辺に比べて、城址付近で谷間が広がる。イリスタヤ川本流とその支流の小川に挟まれた河岸段丘



写真2 ニコラエフカ1城址土塁

上にある平地城である。城址の中央を横断して現在の幹線道路が通る。城址内は畑・牧草地として利用されている。プランは北西－南東に長軸を持つ長方形である。長辺 270 m、短辺 220 m で周長は 960 m を測る。城の内部は平坦である。土塁は西側では 1 m 程と低く、他の 3 面では 2～3 m の高さがある（田村ほか 1995）。土塁の構築法等は不明であるが、ニキーチン氏の教示によると、構築に際して礫は用いていないようである。門は北西側に 2 ヶ所、北東側、南側にそれぞれ 1 ヶ所ある。西側に土塁の切れている箇所があるが、ニキーチン氏によれば、こ

れは 20 年程前にトラクターによって壊されたものだという。このうち、北西門の 1 つは土塁が切れているのみで、城内と外との比高差はなく平坦である。もうひとつの門は、前面に堀が築かれている。この堀は、城を縦貫する現代の道路の北西側付近から延び北東門まで続いている。北東門も土塁が切れているのみであるが、壁両側の際に堀が築かれ、さらに南側の堀外縁には低い土手が築かれている。堀は埋没が進行しており、断面は浅い皿状を呈す。土塁頂部から堀の底面の比高差は約 2m である。南門は、西から延びる土塁と東側から延びる土塁が入れ違うようにして作られている。南東側土塁の外側には、礫が集中している部分があるという。城内部には、建物跡（礎石の跡）と墳墓と推定されている盛土が 4 基認められた。

本遺跡では南門周辺で計 50 m²の発掘調査が行われており、2 枚の文化層が確認されている。上層は渤海時代に属し、下層ではクロウノフカ文化期の住居が検出されている。文化層の厚さは 1.5 m に達する。また城内の建物跡からは、金属製品、粘土、動物骨、魚骨、貝類遺体が採集されており、城の存続年代は 8 ～ 10 世紀の間とされている（ボロディン 1995）。

アヌーチノ（Анучинское）城址

アルセニエフカ川（р. Арсеньевка）左岸に位置する。城址のあるアヌーチノ市街地の南半分はアルセニエフカ川の流れに囲まれている。また南側には、東から流れてくるムラビョイカ川（р. Муравейка）とアルセニエフカ川とが合流する。市街地西側には独立丘状の小高い山があり、城址はここに立地する。市街地に近い東側では工場の跡地や墓地があり、城内北側も携帯電話のアンテナが建設中で、破壊が進行している。

城址は、アヌーチノ市街地西側の小高い山の東斜面を利用している。城址の西側境界は山頂から尾根筋にあたる。南北に長軸を持つ長方形のプランである。周長は約 3000 m である。南側はアルセニエフ川に接した急峻な崖面に接する。城址の周囲には土塁が築かれているが、西側の境界にあたる尾根筋のものはほとんど高さが無い。また崖面に接している南側の土塁も同様に 50 cm 程の高さしかないが、北側、東側の土塁の高さは 1 ～ 2m 程ある。

南側土塁の上には 20 ～ 30cm 程の角礫が散布している。また土塁下には細い平坦面が築かれている。南東部には土塁の切れており、門と考えられている。南西部にも土塁が切れる部分があり、その前面には 1 段下がって馬蹄状の土塁を持つ平坦面が迫り出す。北側には土塁が大きく切れる部分があるが、ここは自然の谷の落ち込みがきつく、土塁は谷の上がり口の両側を塞



写真3 アヌーチノ城址堡壘

ぐように築かれている。その脇に甕城様の門があるようだが、今回は確認できなかった。

城内南部は比較的傾斜の緩やかなテラス状の平坦面が認められ、ここに多数の住居址の浅い落ち込みがある。また、堡壘（редут：高橋学而氏に従い、本稿では城址内にある小規模な独立した囲郭を指して用いる。）も存在する。約 23 × 23m の方形のプランを持つ。四方を巡る土塁の高さは約 2m、土塁頂部の幅は約 1.2 m、基底部の幅は約 5.8m である。土塁上には礫が散布している。また外側には、土塁と接して堀が巡っている。東側、南東側の一部には堀が認められない為、「コ」の字

状の平面形を持つ。堀の幅は約2 mである。堡塁の前面には削平された広い平坦面があり、その下には更に、狭い平坦面が3面、階段状に並んでいる。

ノヴォゴルデフカ（Новогордеевка）城址

本遺跡は、別名クルーグラヤソープカ（Круграя сопка）とも知られている。アルセニエフカ川（р. Арсеньевка）右岸の独立丘に位置する。

城址は、北側に傾斜面を持つ独立丘の上面を利用して築かれた山城である。独立丘の平面形は、東側、西側にそれぞれ2ヶ所、南側に1ヶ所外側に張り出しを持つ崩れた5角形を呈する。この張り出し部は自然地形であるが、平坦面が形成されており馬面のように利用されていたと考えられる。城内は最も高い南側地点で標高220 m、低い北側地点で165 mと比高差が大きい斜面が利用されている。周囲の地形とは切り立った断崖ではっきりと区分され、北西及び、北東の比較的傾斜が緩やかで周囲との比高差が少ない場所以外からは内部に入ることは難しい。門はこの北西部に1ヶ所、北東部に2ヶ所とあり、南東部にも1ヶ所、確認されている。いずれの門も土塁が切れているだけの構造である。また北東部では門に通じる往時の道と推定される通路状の狭い谷が確認されている。この狭い谷は、北東門に通じるものと、もう一方の門付近で南に折れるものに分かれる。後者は段丘面に沿った一段低い所で細い平坦面を形成しており、この面は南東門まで通じている。土塁は段丘



写真4 ノヴォオロディエフカ城址全景

上面の地形に沿って全面に作られている。周長は1026 mを測る。土塁の高さは城内側では低く50～70cm程であるが、南東の門付近の外側では2.5～3 m程度ある。南東には内側にもう1列の土塁が巡る。土塁周辺に礫等の散布は見られず、詳細な構築法は不明だが、土を盛るのみで作られていると考えられる。また今回の踏査では確認できなかったが、北西門付近の丘の下には、馬蹄状に巡る土塁で区切られた部分が存在し、北東側にも直線の土塁があるようである（Артемиева 1998 с.28）。

城内部は細い平坦面が階段状に並んでいる。南西部の平坦面には高さ1 m程の土塁が菱形に巡る堡塁がある。25 m×25 mの規模である（Артемиева 1998）。その他に施設らしきものは無い。但し、今回の踏査時に、南側の最も高い地点で瓦片が採集されており、官衛等の施設が存在した可能性もある。また南側頂部より更に南に10m程低くなった楕円状に張り出した平坦面がある。今回この地点は踏査できなかったが、ニキーチン氏によれば、この平坦面の周囲も土塁が巡っており、城に付随する郭（曲輪）と考えられる。

本遺跡では、北側の階段状の平坦面を中心に計10数回に及ぶ発掘調査が行われている。これまでの調査でリドフカ文化、ヤンコフスキー文化、クロウノフカ文化、渤海期、女真（金・東夏）期の資料が得られている。ニキーチン氏の教示によれば、2002年に行われた発掘調査では、ポリツェ文化期の炕付住居が検出されている。また氏によれば新石器時代の資料も得られており、本遺跡の利用が新石器時代以降、通時的なものであったと考えられる。但し、土塁を含め現在認めることのできる城址の構造は渤海期に作られ、女真期に増築されたと考えられている。

城内の階段状に並ぶ細い平坦面には、住居の落ち込みが密集して認められている。1986～87年

に行われた発掘調査では女真期に属する2枚の文化層が認められ、それぞれの層から住居が検出されている。また13次調査では柱穴構造から112㎡と大型の住居が検出されている。住居は敷石によって2つの部分に分けられ、各部分に2つの煙道を持った炕を持っている。この住居は2部屋の構成か、あるいは2つの建物が別の時代に存在した結果による、いずれかと推定されているが、いずれにせよ女真期において新たな種類の住居と考えられている。またこの住居の下には15㎡の女真期の住居が検出されている。これまでの調査で、12世紀代に属する住居は27基検出されている。

城内部は草木が群生しており、現在、人の利用はない。尚、城址のある独立丘麓より南西側の平原にはポリツェ文化期の集落址が確認されている。また、独立丘麓より北東側は現在畑地となっているが、ここではパクロフカ文化の遺物が散布し、当該期の集落址が存在したと推定されている。これと同一地点かは不明だが、城址より北東500mの場所で青銅器時代～10世紀後半以前の文化層と住居址が見つかった（Гельман 2002）。

シクリャエフスコエ（Шкляевское）城址

アルセニエフカ川右岸の丘陵に位置する。同川を挟んでノヴォガラデフカ城址と向かい合わせの格好となっている。アルセニエフカ川に迫り出した山裾の南斜面を利用して構築された山城である。西側門周辺の一部が破壊されている以外、遺存状況は良好である。北側が標高約230mと最も高く、南東側は標高170mと最も低く川岸の高さとはほぼ同じである。城址の周長約1230mを測る。城址は不整形を呈する。土塁は全面に巡り、川縁や北西の土塁は5～6mの高さを持ちしっかりと築かれているのに対して、山の尾根にあたる北東側の土塁は殆ど高さを持たない。門は西側に1ヶ所、東側に2ヶ所、南側に1ヶ所ある。いずれも土塁が切れているのみの構造であるが、東面北側の門と南側の門は、くい違い虎口状に土塁が重なる構造を持つ。東面北側の門周辺の土塁の一部がトラクターによって破壊されており、土塁の断面が観察できた。断面では、密に詰まった黒色と褐色の砂層が互層堆積しており、土塁は版築により土塁が構築されていることが分かる。この互層堆積は底辺が最も長く、上方に向かって徐々に短くなり、階段状を呈する。後述するノヴォパクロフカ2城址における土塁の堆積状況と類似している。土塁基底部の幅は約10m、頂部の幅は約1.5mである。南側の土塁は川の流れに沿って徐々に山に登っていく。南側では、両側の土塁を入れ違いにして通路状の入り口が形成されている地点がある。南側、北側では土塁から半円状に張り出した馬面がそれぞれ2ヶ所あるが、いずれも不明瞭である。西門の両側には土塁外に5m程の平坦面が巡り、その外縁には高さ50～70cmの土手を持つ。部分的にはこの土手が2列ある場所もある。西門の城内南側には約20m四方堡塁がある。土塁の高さは約1mである。西門北側の城内には20m程の溝が「コ」の字状に巡っている。北西部の城の外には、土塁で長方形に区切られた郭（曲輪）（約80×40m）がある。この郭内は踏査できなかったが、ニキーチン氏によれば、ここにも西門で確認できた例と似たような堡塁があるという。北東側は尾根に沿って緩やかに傾斜していき、城内も比較的平らである。ここに住居址と推定される浅い落ち込みが多数認められる。



写真5 シクリャエフスコエ城址全景

過去、北東門周辺で発掘調査が実施され、住居址が検出されている。住居址は平地式で、長方形のプランを持つ。規模は 20 m² である。内部には、3 つの煙道を持つ炕がある。本城址は当初、11 世紀～12 世紀初めの年代が与えられていたが、検出された炕の形状から 12 世紀から 13 世紀初めの年代が考えられている。その為、対岸のノヴォゴロデフカ城址とある時期、共に利用されていたと考えられている（Артемиева 1998 с.29,30）。

チュグエフカ（Чугевска）城址

ウスリー川右岸の平原、現チュグエフカ市街地にある。ウスリー川右岸にある平地城である。城址外の西側約 300m にはウスリー川が流れ、南側にはウスリー川に繋がる支流が流れている。城内は、現在建物が立ち並び集落となり、本来の構築物の痕跡は認められない。しかし、西門の一部が削られている他は、土塁、門、堀の遺存状況は良好である。

城址のプランはほぼ正方形である。縦横の軸は殆ど東西南北に沿っている。四方は約 8m の高さの土塁に囲まれており、周長約 2100 m を測る。土塁頂部の幅は約 1.4 m、基底部の幅は約 25 m である。土塁の各辺に 12～13 ヶ所の馬面がある。土塁の外には堀が巡っている。堀の幅は、上場で 14



写真6 チュグエフカ城址馬面

～15 m、深さは現況で 3～4 m である。底面は中央がやや浅い皿状である以外はほぼ平らで、断面形は箱掘状を呈する。堀の両側には低い土手が築かれている。土塁の下場とこの土手の間には、犬走り状の平坦面が形成されている部分もある。各四辺にほぼ中央に門があり、いずれも、一方の土塁から短く真直ぐ伸びる土塁と、もう一方から L 字状に伸びた土塁が組み合う甕城となっている。門前面にも堀があるが、その深さは他の部分と比べると浅い。なお、西門の一部

が破壊され、土塁の断面が観察できる。断面では密に詰まった褐色と黒色のシルト層が互層堆積しており、本城址の土塁が版築によって構築されていることが分かる。イワニェフによれば、この土塁は 2 度に分けて土が盛られているとされているが、今回の観察では特にこのような堆積状況を確認できなかった（高橋 1984）。城址内では文様磚の瓦堆、大定通宝が採集されている。



写真7 パブロフカ城址土塁

パブロフカ（Павловка）城址

パブロフカ川左岸に位置する。パブロフカ川左岸に舌状に突き出した山塊の東側斜面を利用して築かれる山城である。現況は山林で現在、人の居住はない。遺存状況は良好である。形状は斜面に沿った不整の三角形を呈する。周長は約 1900 m を測る。山塊の尾根筋が城址西側の境界となっている。西側の頂点で標高約 320 m、城址の東側境界で約 240 m と、城址は極めて急な傾斜面にある。城の東側境界は切り立った崖

面で、直下にパプロフカ川の支流が流れている。土塁は城址の全面にあるが、西側と東側ではほとんど高さが無い。東側は川から切り立った崖の途中を平らにならして通路状の平坦面を作り、その崖側に低い土手を設けている。城址南東部には急峻な谷が入り込むが、これを塞ぐように低い土手が築かれている。東側の土手周辺では礫が散布している。東側の土手に直行するように低い土手が斜面に沿って築かれている。

南西側は城址の築かれている山塊と同じような高さで台地が続き、3～4 mの高さの土塁が築かれている。幅約5 mの門があり、門両側には土塁から楕円状に張り出した馬面が築かれている。東面にも2ヶ所、土塁の切れる部分があり、門と推定されているが、土塁が低いこともあって明確ではない。

城址内はほとんどが急峻な斜面であるが、南西部の山塊の頂部付近は比較的平らな面が広がる。ここでは、住居址と見られる浅い落ち込みが纏まっている。この周辺の土塁外面には馬面が築かれている。また東側でも斜面に沿って階段状に細い平坦面が並んでおり、ニキーチン氏によると、ここにも住居址があるという。

コクシャロフカ (Кокшаровка) 1 城址

ウスリー川に繋がる小河川コクシャロフカ川左岸の微高地に位置する。現況は草木が群生し、一部畑地として利用されている。南側土塁の一部が道で破壊されている他は、遺存状況は良好である。また城外北側は草原となっているが、ここでも城址内と同様に渤海～女真(金・東夏)期の遺物が採集されており、当該期の集落があるとされている。

城址全体の形状は南北に長い不整の多角形を呈し、南面、東面は河川の沼沢地に当たる。土塁周長は約1700 mである。土塁上には礫が散布し、礫と土によって構築されていると考えられる。南側土塁の高さは4～5 mである。また、西・北側の土塁は南側に比べ高いようである。ニキーチン氏の教示によれば、城内を東西方向に区切る土塁もあるらしい。土塁の外には堀が巡るが、川に接する北東側と東側の一部には見られない。堀は最も広いところで幅約10 mである。堀の底面は平らで、断面からすると箱堀状の掘り込みとなっている。また土塁と堀の間には部分的に犬走り状の狭い平坦面が作られている。

門は北側と西側に築かれている。いずれも片方の土塁から鉤手状に土塁が迫り出した甕城様の構造である。但し、西門では、鉤手状に伸びる土塁は外周する土塁に比べ一段低くなっている。南東側、東側にも土塁が切れた部分がある。特に東側の門は前面に川があり水門とも考えられる。南西には土塁と同じ高さで楕円状の馬面が築かれている。城内北東部分には堡塁がある



写真8 コクシャロフカ1城址土塁



写真9 コクシャロフカ2城址城内

ようだが（高橋 1984、及びニキーチン氏のご教示）、今回は確認できなかった。

本城址の発掘調査は、シャフクーノフ氏、ニキーチン氏による試掘調査以外行なわれていない。ニキーチン氏によると、渤海～女真（金・東夏）期に属する資料が得られており、城址の年代も当該期と考えられている。

コクシャロフカ 2 城址

コクシャロフカ川は東から急峻な山並の中を流れ、ウスリー川に合流する。本遺跡はこの山並と平地にでる際にある急峻な山頂に位置する。現況は山林で、人の居住はない。

城は標高約 400 m の山頂を頂点とし、山の南斜面を利用して築かれている。西側、東側の境界は山の尾根と一致する。城址内は急勾配で、特に南側中央には谷が入り込んでいる。城址全体の形状は不整の三角形を呈する。周長は約 2300 m を測る。南側城址の境界での標高は約 250 m であるが、この地点でも尚、山の中腹にあたり、南～西側麓を流れるコクシャロフカ川流域の平地とは 60 m 程の比高差を持つ。その他の側でも、麓まで急傾斜の斜面が続いている。今回踏査できたのは西側、東側部分だけである。この両側とも山の尾根に沿って細い通路状の平坦面とその外側に低い土手が築かれている。部分的にこの平坦面と土手のセットが 2 列階段状に築かれている部分もある。北側、山の頂点にあたる部分には楕円状に平らな場所があり、ここからはちょうどコクシャロフカ 1 城址を見下ろすことができる。東側、南側の緩斜面に住居址の浅い落ち込みが確認されている以外は、特に建造物は確認されていない。

ゴルバトカ（Горбатка）城址（図 2）

イリスタヤ川右岸に位置する。ニコラエフカ 2 城址を過ぎ、イリスタヤ川を北上すると、ほどなくして平野部に入る。ゴルバトカ城址はこの平野部分に位置し、そのままイリスタヤ川に沿って北上すればハンカ湖に、西に向かうとウスリースク市に至る。城址内は現在集落となっている。西門から東門を貫通する道が現集落の中央通りとなるなど、本来の地割が一部遺存しているらしい。東西の門は一部その形を崩しているが、土塁の遺存状況は良好である。

城址の西側、北側には近接してイリスタヤ川が流れている。城址の形状は北西方向に間延びした不整形である。土塁の周長は約 1220m。城址は微高地に占地する為、土塁の高さは城内・外で異なる。

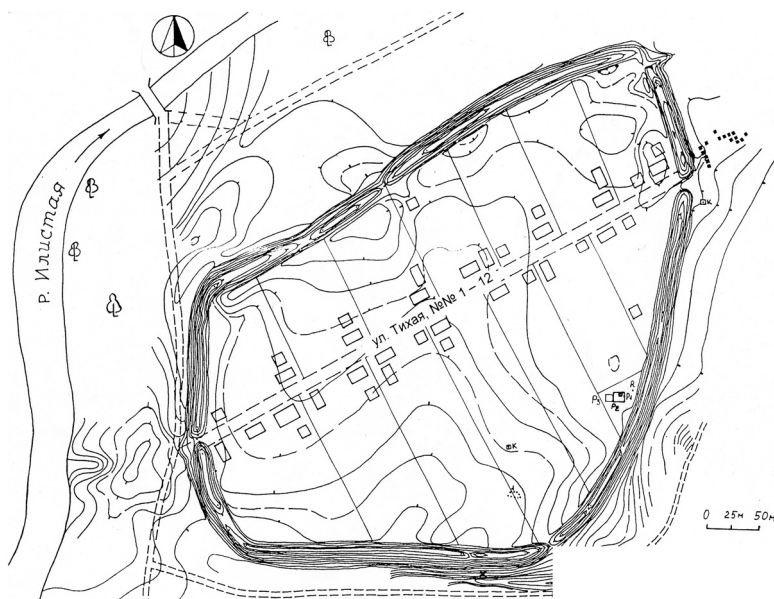


図 2 ゴルバトカ城址平面図

ゲルマン（ゲルマン 1999）によると、城内で 2～2.3m、城外で 4～4.2m を測る。土塁頂部の幅は 2.5m、基底部で 10～16m である。土塁は土積で、表面が礫で補強される。今回の調査でも土塁頂部に礫が散布している状況が認められた。土塁に馬面等は認められない。門は東西南北の方向とはややずれているが、四方に築かれている。いずれも単純な切通しで、特に甕城等の付属施設はない。

本遺跡の発掘調査はこれまで複数回行なわれている。1997 年の調査では、8～10 世紀に渡る渤海期の文化層が

3枚確認されている（ゲルマン 1999）。また 2000 年、2001 年では、渤海期の住居址 8 基、文化層 5 枚が確認されている（小畑 2003）。発掘調査によって得られた資料はいずれも渤海期に属し、金代のものはない。

4. ノヴォポクロフカ（Новопокровка）2 城址の測量調査

今回行なった沿海州における城址の調査のうち、ノヴォポクロフカ 2 城址については、全体形状の測量を実施した。本城址を測量対象としたのは、遺存状況が極めて良好であることに加え、本城址が沿海州北部地域において最大級クラスの規模を持ち、金の縁辺地域の掌握の実態を検討する上で重要な城址と考えられるためである。

ここでは、測量結果に基づく城址の内容、出土遺物について述べることにする。なお、城址のこれまでの調査成果については、既にクラディン氏とニキーチン氏によって公表されており、本報告の論考編で、この論文の邦訳を掲載したので、あわせて参照されたい。また、この論文で記載された資料の一部を図化することができた為、今回の採集資料と併せて、観察所見とともに報告する。

調査は以下の方法によった。まず城址内中央やや西よりの地点で基準点を設置し、この地点の GPS 測定を行い、北半球 UTM53 系の座標を取得した。誤差を少なくするために、測定は約 1 時間の連続測定の平均値を用いた。標高については、測量時により得られた WGS84 楕円体高を、米国地球空間情報局が提供する座標変換ソフト Geotrans ver. 2.21 により標高に変換したものをを用いた。旧ソ連製地形図や米国地質調査所（USGS）が公表する全世界高度情報（SRTM）と、標高の測量結果を照合したところ、差は大きくとも 1 m 程度で、よく整合していることが確認できた。この点から見て、平面座標のずれも数十センチ程度におさまったのではないかと考えている。そして、ここを基準点としコンパスとレーザーレンジファインダーを用いコンパス測量を行った。測量する対象に応じて随時、レーザーレンジファインダーで基準点を移動しながら、測量を行った。今回の調査では、城址の西側と南側に位置する構造物の全て（城壁となる土塁、馬面、犬走り状の平坦面、堀、堀外側の土手、門）を測量した。日程の関係で、コンパス測量ができなかった北東端部に関しては、GPS による座標測定とレベルによる水準測量を行い、また、等高線作成のためのポイント測量もコンパス測量により行った。以上の結果を総合し、城壁等の全体図と地形図を作成した。以上の測量成果と、SRTM から作成した周辺の地形図をあわせたものが図 3 である。

ノヴォポクロフカ 2 城址は、沿海州クラスノアルメイスキー地区ノヴォポクロフカ村の北東 0.5km にあるイマン（р. Иман）川左岸に面する丘陵上に位置する。城壁が良好に保存され、住居址のくぼみも随所に確認できるなど、遺存状態は良好である。城址内は、一部が、現在畑地として耕作され、遺物も採集されている。城址の脇を流れるイマン川は、シホテ-アリニ（Сихоте-алинь）山脈の奥深くに源流があり、ダリネレチェンスク（Дальнереченск）市西郊でウスリー川（р. Уссури）に合流する。流量豊富なイマン川流域の両岸は平野が広がり、同川流域が往時の重要な交通路のひとつであったことが容易に想像される。周辺には靺鞨系文化の墓が検出されているロシーナ（Рощино）遺跡群や、ノヴォポクロフカ 2 城址と同じく金・東夏期のノヴォポクロフカ 1 城址が存在する。ノヴォポクロフカ 1 城址はノヴォポクロフカ市街地に位置し現在はほとんど壊滅しているが、ノヴォポクロフカ 2 城址との関連性を考える上で重要である。

ノヴォポクロフカ 2 城址のある丘陵の北側と東側はイマン川とその支流に沿った断崖となってい

る。一方、西面と南面は土塁や堀で城壁を作っている。ただし、地形を見ると、土塁の設置された場所は、ほぼ全て丘陵の稜線部に位置しており、これにより高い位置に城壁を置き防衛力を高めるとともに、積土の手間を減らしているのであろう。特に、南面では自然の丘陵の高まりを利用し、部分的な削平により城壁・馬面部分を作り出し、土塁の積土も1～2m程度に抑えるなどの工夫が見られる。また城址内は、南西から北東に走る丘陵稜線により大きく南北に2分される。また、この丘陵の北東端にも低い土塁で囲まれた部分がある。南部の東はイマン川の支流に繋がる谷が大きく入り込み、この谷を中心に緩やかな傾斜地となっている。ここに、人工的に平坦面を何段か作り出し、住居を置いている。北部にも2ヶ所の小谷部を中心に住居を設置している。また、西側の土塁周辺には平坦部分がひろがり、その周辺に倉庫や行政・管理施設などが置かれていた可能性がある。以上のように、本城址は、自然地形を活用して占地しており、そのため、城址全体の形状も自然地形に合わせており、平面形は全周約1900mの不整形をとる。以下で、各部の詳細を述べる。

上記のように地形変化が比較的緩やかな西面と南面では堅固な土塁が築かれている。土塁は城址内側で3～4.5m、外側で4.5～8mの高さを持つ。幅は頂部で1m、基底部で12～14mを測る。西側では、土塁の裾と堀の間に、馬面の基部の間を繋ぐように犬走り状に平坦面が作られている。西面の土塁屈曲部には、城址の内外を繋ぐ現在の道路が通り、土塁が破壊されている。ここで断面を観察することができ、本土塁は版築により構築されていることが確認できる。土塁に沿って空堀が巡り、その幅は上端で4～5m、深さ約1mである。堀の底面は平坦で、断面は逆台形状の箱堀である。堀の外側には幅3～4m、高さ0.5～0.7mの頂部に丸みを持った小土塁が築かれている。

土塁には計15基の馬面が築かれている。基底部で直径16～20mの半円形に突出する形状や、馬面上の平坦面が土塁頂部より数十センチ高くなっている点等、画一性が高い。北側から順2番目の馬面は、土取りのため馬面の外側が基底部近くまで削平されているが、本来は他の馬面と同様な形状であったと思われる。自体は他と変わらないが、土塁より0.5m程下がっている点で異なっている。なお、クラディン氏等の論文では、馬面は14基となっている。おそらくは、この2番目の馬面を含めていないのであろう。北から5番目の馬面は土塁が内側に屈曲する部分に近く、そのため場面前の空堀と小土塁は屈曲部分の角を覆うようにやや広く突き出る。また南面にある14番目の馬面周辺は円錐状に自然隆起しており、馬面はこの頂部に丘陵を削りだして作られる。前面も丘陵裾を削り出して造り、見かけ上は大きく広がる。門は土塁南西端に1ヶ所設けられている。土塁の外側に半円状の土塁が付加し、中央を開けて、甕城としている。

城址北面と東面の断崖部では、本格的な土塁は築かれず、部分的に補足的な小土塁が設けられているにすぎず、ほとんど観察されない部分も多い。高さは概ね0.5m以下で、幅は頂部で0.5m、基底部で1～2m程である。ただし、川岸の高さと同一となる南東部中央の谷底では、最大で約3mの高さを持つ土塁が築かれ、中央には平入りの門がある。おそらくこの部分が川からの入口となり、前面に船着場が存在したのであろう。

5. ノヴォパクロフカ2城址出土の遺物

今回実見し、図化できた遺物は、1998・1999年に行われたクラディン氏等による調査で得られた資料を中心に、2004年の採集資料も含めている。1993年に本遺跡から採集された釉薬のかかった陶磁器片、貨幣については実見できなかった。また今回図示できなかったが、他にも車輪の軸部（中国でいう「車轄」）、鉄鏃も得られている。

土器（図4）

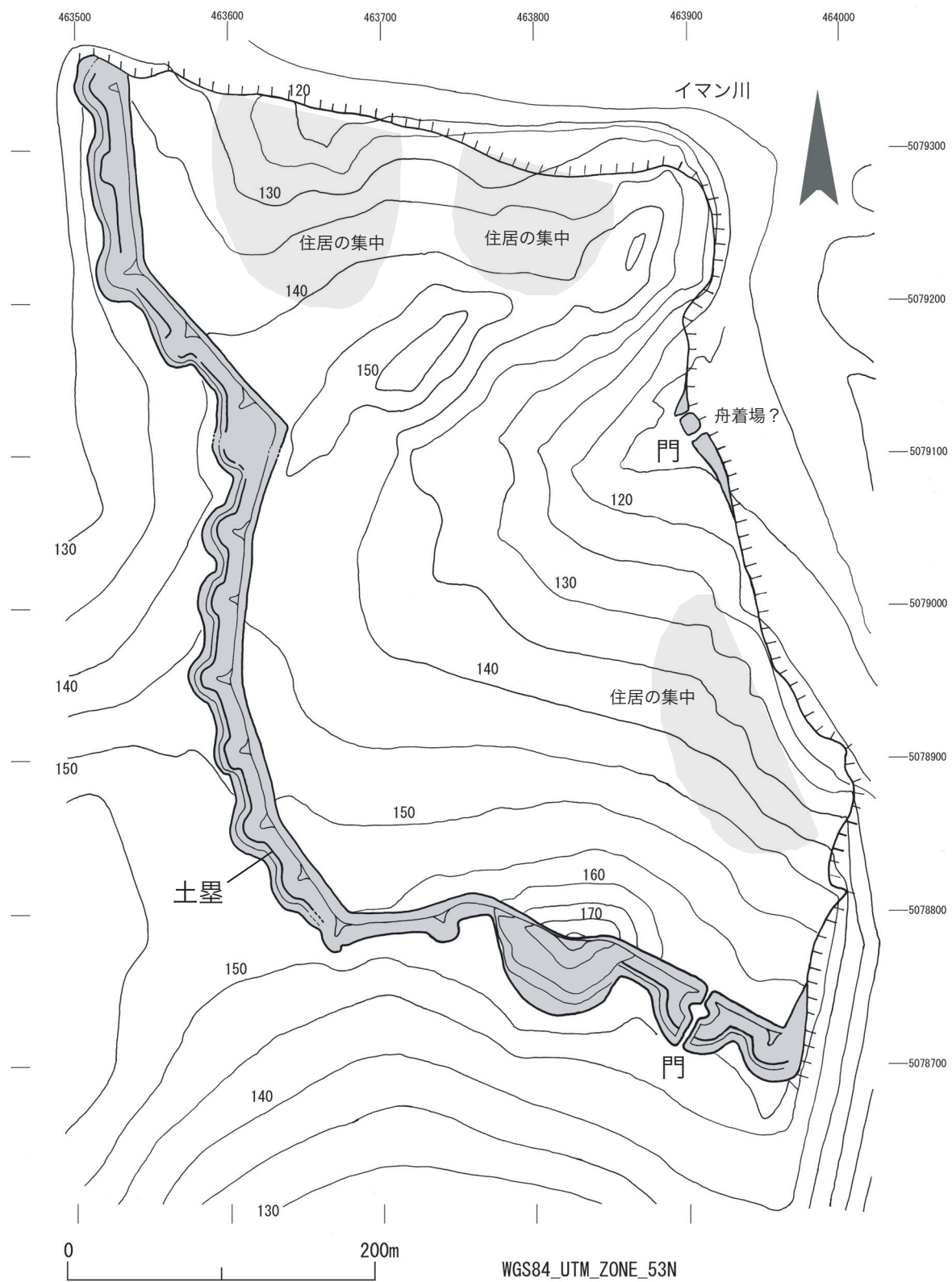


図3 ノヴォボクロフカ城址平面図（縮尺4千分の1）

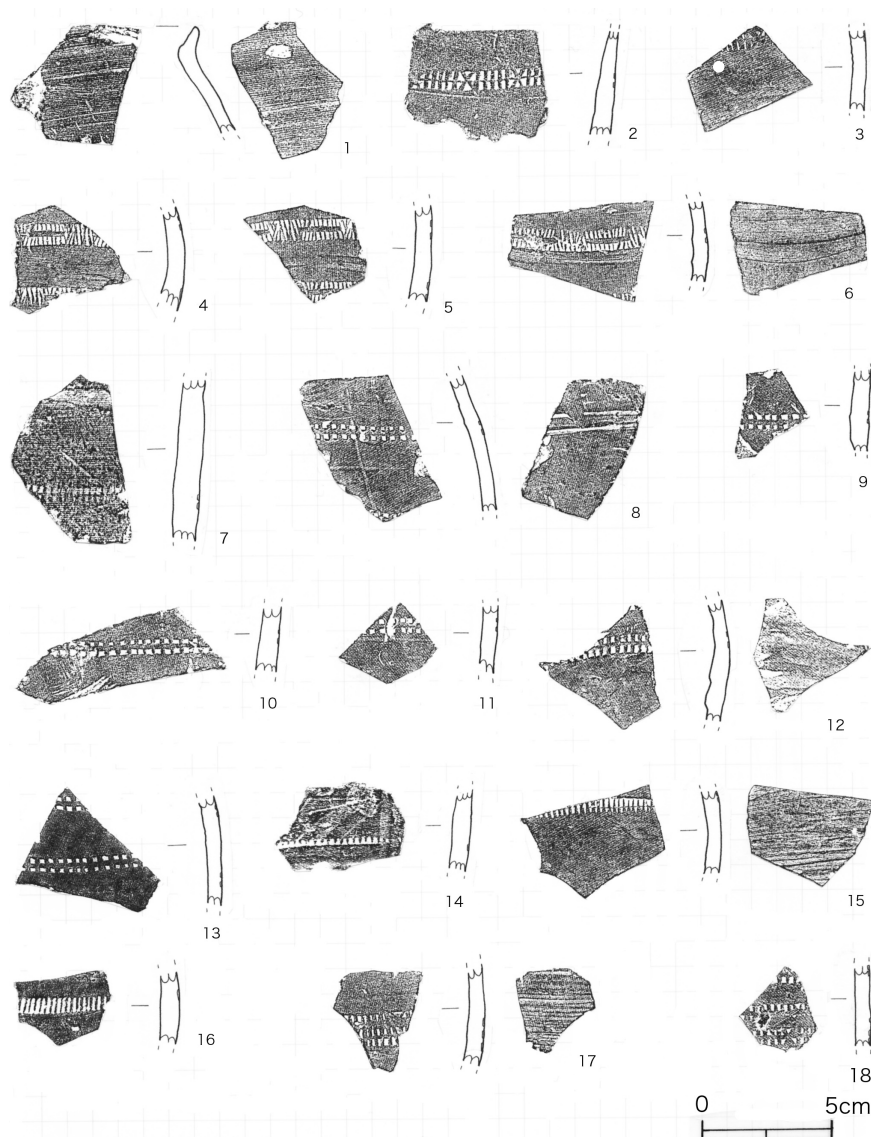


図4 ノヴォポクロフカ2城址出土土器 (1/3)

1は口唇直下で屈曲する口縁部片である。胴部文様は、「型」の圧痕あるいは刻み目が帯状に巡る。この帯状の型押文、刻み目文は間隔を空けて複数状施文されるものが多い。また7では横方向に、14では縦方向に、幅広の沈線が引かれている。また8では細い沈線が十字状に引かれている。小片のために全体の文様は不明であるが、これらはいわゆる「瓜稜」文様の一部であろう。いずれも文様の施文後にミガキ調整が行われている。

金属器 (図5)

鉾 (1) 鉄製鍛造の鉾である。完存する。全長は27cmである。鉾の身部と袋部は、明瞭な関で区分される。鉾身の長さは14.2cm、袋部の長さは12.8cmである。鉾身の幅は4.8cm、厚さは中央で6cmを測る。鉾身は鎚造りで、両面中央に突出した脊を作り出している。刃は研ぎ出されている。袋部は直裁で、断面形は円形である。目釘孔が袋部側面に2ヶ所認められるが、片側の孔に対してもう片側の孔は上方に位置する。付近の住民が採集した資料である。

羽釜 (2) 鉄製鋳造の羽釜である。約1/3が残存する。足は1本しか残っていないが、その付き方から考えて、3足と考えられる。足部を含めた高さは18cm、口径14.4cmである。口縁(「羽」より上部)はやや内傾しながら直立する。口縁部は波打ってわずかな段を形成している。口唇は内外面がやや丸みを帯びるが平坦である。胴部(「羽」より下部)から底部にかけては、丸みを帯びてお

いずれも1998、1999年に行われたクラージン氏等による調査で得られた資料である。発掘された住居址で得られた資料ではないが、内容はほぼ同じである。資料の内、口縁部片である1以外は、いずれも胴部片である。いずれも小片である為に器形等は不明である。ロクロによる成・整形と考えられ、内外面には指、ヘラを用いたミガキ、ケズリ、ナデといった調整痕が残る。胎土にはほとんど砂等の混入は認められず、きめが細かい。焼成は高温でなされており硬質である。また還元炎焼成によるものと考えられ、器内外面とも青灰色あるいは黒味がかかった灰色の色調である。その堅緻な質や色調は、やや軟質な感じはあるが、須恵器に近い印象を受ける。外面はミガキ調整により丹念に平滑化されており、鈍い光沢を持つ。

り、底面もおそらくは丸底に近いものと考えられる。口唇から底面までの高さは推定 11.5cm である。足は「羽」直下より斜めに直線的に取り付けられている。足は鍋本体の取り付け部（上部）から先端まで、長さ 12.5cm である。足の先端は丸みを帯びている。また先端に幅 0.7cm の円形の孔が空いている。本資料は城址内の北側で 2004 年に採集した資料である。

帯金具 (3) 青銅製。外径の長さは 4.1cm、内径の長さは 3.4cm である。

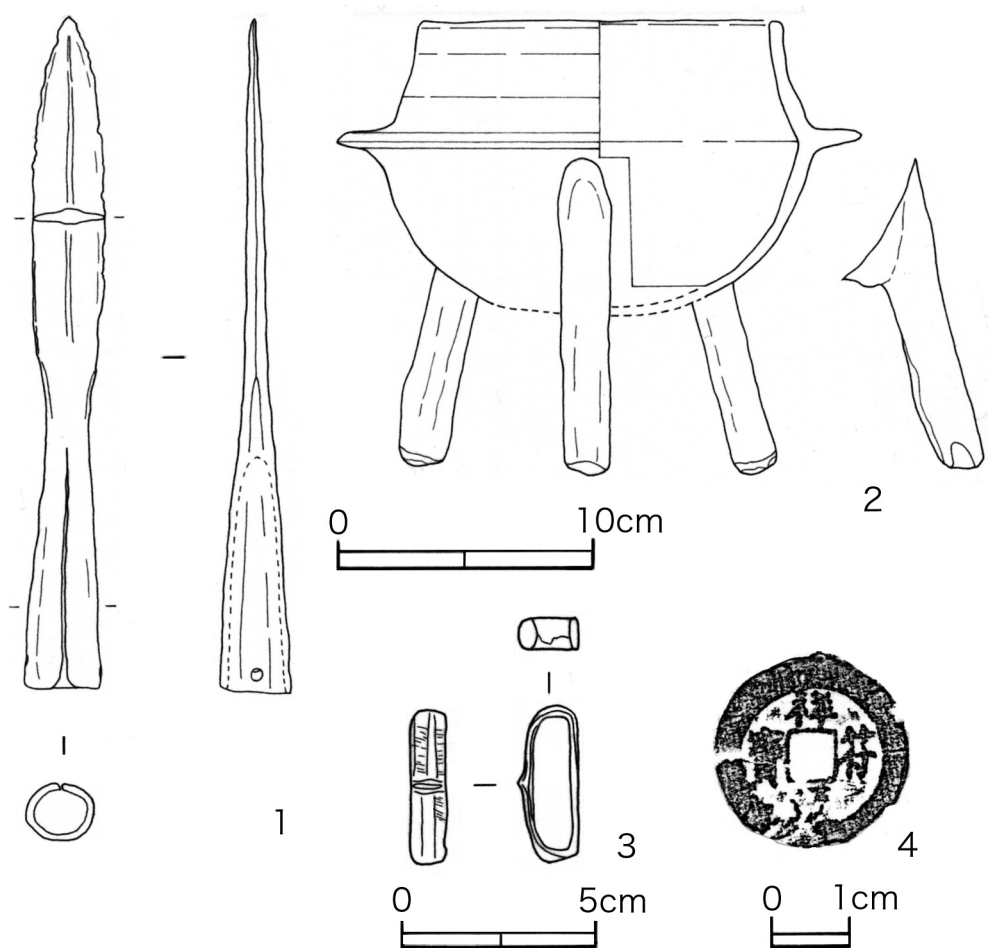


図5 ノヴォボクロフカ2城址出土金属器

表面中央には山形の突起を持つ。表面頂部には平坦面が作られ、その両縁には細かな擦痕が見られる。側面は面取りされており、やすりによる削り痕が観察できる。上部の丸みを帯びた両縁にも削り痕が観察できる。上部中央には鑄型の合わせと思われる蛇行した筋が確認できる。1998 年、クラーデン氏等の調査時に得られた資料である。

銅銭 (4) 本遺跡では太平通宝 (976 年初鑄) と祥符通宝 (1008 年初鑄) の 2 枚の北宋銭が得られている。前者は 1993 年採集、後者はクラディン氏等の調査時に得られた資料である。

結 語

平成 16 年度から、沿海地方において女真 (金・東夏) 期の城址の調査に着手することとなった。

この調査では、城址の資料化を行なうのと同時に、大規模遺蹟の調査法の検討、GIS 構築に則した資料化の方法も検討してきた。今回の調査では、実際に調査方法の有効性を確かめられたと考えている。また、調査終了後、収集データの GIS 化を進めており、有効な成果を得ているところである。GIS については、資料が蓄積された段階で、印刷とは別な形での公開と共有化を目指している。次年度については、日本海沿岸地区での城址の地理情報の取得と、ノヴォボクロフカ 2 城址内部のより詳細な情報の取得を行なう予定であり、精度の向上と安定、調査手順の迅速化などの調査法に関する課題についても取り組んでいきたい。また、ノヴォボクロフカ 2 城址では、鉄釜など明らかに金・東夏期と考えられる遺物とともに、パクロフカ文化期の土器が共伴することが明らかになった。これは、従来、11 世紀ころとされてきた同文化の下限が 12 世紀ころまで下がる可能性を示唆しており、同

文化の土器片を出土したサハリン南端のシラヌシ土城の年代を考える上でも重要な資料である。次年以降の調査では、土器様相も課題としていきたい。

注

- 1) 藤本悠・中川雅史・山田修、2004、3Dプロファイラスキャニングデータによる考古実測図の作成ーレバノン共和国ティール市ラマリ遺跡発掘調査における3Dデータからー、地理情報システム学会講演論文集 vol.13、pp.363-366
- 2) Geographic Information System の略
- 3) LTL 社 MapStar System ECM II・IMPULSE Electronic Compass Module II を使用
- 4) 泉拓良・松本健・辻村純代、2002、レバノン、ティール遺跡周辺の遺跡踏査 2001 年度 -GIS 考古学の応用-, Reconstruction of the Ancient Orient(2001)、pp.33-35
- 5) Otradnoe・Nikolaevka・Golbatka・Anuchino・Novogordevka・Shukalevskoe・Chugevka・Pavlovka・Koksyarvka1・Koksyarvka5 の 10 ヶ所。
- 6) 位置情報補正サービス。GPS 基地局からのビーコン信号によって、その誤差を補正するシステム。現在各国で基地局の整備が進められている。
- 7) Trimble 社の GPS Pathfinder Pocket を使用
- 8) ロシア沿海地方のラスター画像を地図の四隅と中心の座標を利用して位置を合わせた。
- 9) SRTM (Shuttle Radar Topography Mission) はアメリカ航空宇宙局 (NASA) の Web 上から入手可能な 3 秒メッシュ (約 90m) の高度情報 (DEM) であり、等高線を作成し照合することも可能である。

参考文献

(邦文)

- オ・エス・ガラクテオノフ (中村嘉男訳) 1982 「シャイギン城址の堡塁の発掘」『シベリア極東の考古学』No.2
- 小畑弘己 2003 「極東圏における古代・中世の穀物研究の現状と課題」『北東アジア中世遺跡の考古学的研究 第1回総合会議』配布資料
- ゲルマン, E. I. 1999 「4. 沿海州ゴルバトカ土城の調査」『古代国家渤海と日本の交流に関する考古学的調査』
- 高橋学而 1984 「ソ連領沿海州に於ける金代城郭もついでに若干の考察」『古文化談叢』第14集
- ボロディン, V. I. 1995 「2 沿海地方における渤海土城」『環日本海地域の古代文化交流』
- 田村晃一ほか 1995 「5 沿海地方第2次踏査 (1994 年 8 月～9 月) の記録」『環日本海地域の古代文化交流』

(露文)

- Артемьевка, Н. Г. 1998 Домостроительство чжурчженей Приморья, Владивосток.
- Гелльман, Е. И. 2002 К вопросу о культурной принадлежности Новогордеевка селища, Археология и культурная антропология Дальнего Востока и центральной Азии, Владивосток.
- Шавкунов, Э. В. 1990 Культура Чжурчженей – Удигэ XII – XIII вв и проблема происхождения тунгусских народов Дальнего Востока, Владивосток.

ロシア沿海地方出土文字資料の調査

井黒 忍

北東アジアの中世遺跡では、文字が記されている土器や銅器等が出土する場合がある。これらは遺跡の性格や当時の社会を知る上で重要な史料である。現在のところそれらの成果は断片的に報告されるものもあるが全容は不明である。本研究では、これらの史料を集成・整理し、出土遺跡における考古学的知見と併せた学融合的研究のための基礎史料とすることを意図している。その作業の一環として、平成16年2月29日より3月7日の日程で、ロシア連邦沿海州出土の金代官印および各種文字資料の実見を目的とした資料調査を行った。調査地は、ロシア沿海地方ウラジオストック市に所在するロシア科学アカデミー極東支部歴史考古民族研究所・極東大学博物館・国立アルセニエフ沿海地方博物館の3カ所である。

まず、科学アカデミーでは付設の博物館に展示される「治中之印」・「耶懶猛安之印」および私印・磁器・銅権を実見した。さらに、A. イヴィリエフ上級研究員の収集ファイル中に収められる「同知鎮安軍節度使事印」・「左三部架閣管勾之印」・「勾當公事之印」・「上京路勾當公事荒字号之印」を閲覧するとともに、近年の出土・研究状況を教示される。また、ホレフ研究員氏から、アナネフカ城址出土刻字土器（文字は未解読）を、アルテムエヴァ研究員からはウスリースク市クラスノヤルスク城址出土の文物に関する最新の情報を提供された。

極東大学博物館においては、官印および文字資料を確認することはできなかったが、州立博物館では展示品として「総押所印」・「行尚書省宣差提控印」に加えて未解読の一官印を実見した。同行したA. イヴィリエフ氏によれば、同博物館には展示品以外にも数点の官印が所蔵されているとのことである。但し、その調査には正式な手続が必要であり、今後も引き続き調査を行う必要がある。

また、今回調査時には文字資料として刻銘を有する仏像二点を確認することができた。一方はアナニエフカ地区出土、もう一方は出土地不明とされるものであり、それぞれ図像は異なるものの、両像の背にはともに「泰州主簿之記」の文字が刻される。この「泰州主簿」刻銘に関しては、中華人民共和国黒竜江省・吉林省でもそれぞれ銅鏡・銅風鈴の出土が報告されており、軍事的要衝として大規模な徙民・土地開発が実施された泰州の北東アジアにおける重要な意味を示唆するものと言えよう。特に沿海地方出土の両点がともに仏像であることから、仏教を通じた北東アジアの人的・物的交流を解明する必要があり、今後の検討課題としたい。

以上の成果は、北東アジア出土文字資料データベース、北東アジア出土官印データベースに組み入れる予定である。今後は、中国領内資料の調査、碑文等の史料についても集成・整理を進めていく必要がある。

モンゴル国アウラガ遺跡と周辺部の調査

白石典之・出穂雅実

ヘンティ(Хэнтий)県デリゲルハーン(Дэлгэрхаан)郡アウラガ(Аврага)遺跡では、平成13年より、國學院大學・新潟大学を中心とする調査団が調査を継続してきた。そして、平成16年度からは新たに本科学研究費を用いて調査を継続していくこととなった。

ここでは、平成16年に実施したアウラガ遺跡とその周辺部の調査の概要を述べる。平成16年の調査期間は8月5日から8月19日の15日間であった。参加メンバーは加藤晋平・内田宏美(國學院大學)、B. ツォグトバートル・N. エルデネオチル(モンゴル科学アカデミー考古学研究所)、古谷尊彦(千葉大学)、三宅俊彦(東洋文庫)、飯田史恵(滋賀県立大学)、白石典之・宮尾美穂(新潟大学)、出穂雅実(札幌市埋蔵文化財センター)である。

すでにこれまでの調査で、アウラガ遺跡はチンギス・カンの本拠地「大オールド」跡であり、その中央に位置する「第1基壇」を宮殿址であると特定している。そこからは3期の建物址が重なって検出され、以下のように変遷したことを明らかにした。最下部建物(チンギス＝カン宮殿)は13世紀初頭に造られた。続く下部建物は1229年に改築されたオゴダイの宮殿であり、1235年のカラコルム遷都後はチンギスの霊廟として機能したと思われる。13世紀末、その上に新たな祖宗の霊廟として上部建物が造営された。遺物には中国陶磁器、在地製陶器、ガラス、鉄器、家畜動物骨などがある。

平成16年度は基壇周辺に発掘区を設定した。その結果、基壇北裾と東裾から、焼けた家畜の骨と灰が詰まった穴が多数検出された。時期は13世紀中葉から15世紀の間と想定できた。家畜骨はウマ、ウシ、ヒツジからなり、ウマの出土が多い。元代における死者の弔いの祭祀に「焼飯」という供物を焼く儀式があった。とくに、宗廟の大祭にはウマが用いられ「焼馬」といった。出土した遺構はそれと一致する。また、出土したウマの部位は頭骨、頸骨、肋骨が大部分であった。いずれも高貴な人物に捧げる部分だといわれる。その他特筆すべきことに、獣骨にともない景德鎮産の龍文白磁が出土した。これらは、チンギスをはじめとする歴代皇帝たちの霊に捧げられた供物と考えられる。また、骨製の「ものさし」も出土した。完形品ではないが、1寸が2.96cmであり、これまでチンギス宮殿の造営尺と推定してきた1尺29.6cmの尺度が具体的な遺物によって証明されたことになる。なお、アウラガ宮殿の調査では、B02-1 班酒井英男教授に各種の分析等で多大なご協力をいただいている。特に、平成16年度には、現地での探査に班員が参加していただき、成果が得られた。今後も、協業を継続し、学融合を進めていきたいと考えている。

宮殿部の調査と併行してアウラガ遺跡周辺地域の一般調査も行った。モンゴル帝国形成までのこの地域の動態を明らかにし、遺跡GISを構築するための基礎データの蓄積をはかることを目的としている。調査対象地区は、アウラガ遺跡を中心とした100km×100km程の範囲である。行政区分上ではヘンティー県バヤン・ウラーン郡、デルゲル・ハーン郡、バヤン・ムンフ郡にまたがり、地形上はヘンティー山地南部に区分される。主としてヘルレン川流域の段丘、扇状地、山麓緩斜面、及びアウラガ川南東山地において集中的に踏査を行った。

結果、今回の分布調査では青銅器～鉄器時代の墳墓群3ヵ所、新石器時代の遺物散布地13ヵ所、及び旧石器時代の遺物散布地8ヵ所など合計17地点(複合遺跡6地点)を確認した。遺跡は全てGPS(Garmin GPS 3+)によって位置座標が取得された。なお、今回確認した地点には、イフ・ハイラント遺跡やシャル・ハド遺跡など、かつてゴルバンゴルプロジェクトにおいて確認された遺跡も

含んでおり、位置情報をあらためて取得することができた。

今回の分布調査によって、アウラガ遺跡周辺に存在する遺跡を多数確認し、その立地や分布に関するデータを蓄積することができた。また、周辺の環境情報（テクトニクス、地形・地質、生物群系、植物群落及びその配置）についても多くの情報を回収することができた。このような遺跡の分布状況や周辺の環境情報の蓄積は、アウラガ遺跡の発掘調査の成果を多角的に検討する際のデータとして重要な意味を持つものと考えている。

本年度をもって、アウラガ遺跡では宮殿発掘という第1ステージを終了した。2005年からは、新たに市街地部に調査を進めていく予定である。鉄生産関連工房の存在が予想され、多分野の研究者の方々にご協力いただく必要があり、学融合的研究の実践の場としても期待できる。また、同時に周辺部においても一般調査を継続していく。これらの調査により、モンゴル帝国形成・興隆の過程を明らかにする重要資料が得られるものと考えている。



写真1 灰層内獣骨出土状況



写真2 景德鎮白磁龍文鉢出土状況



写真3 アウラガ遺跡発掘風景

中国内蒙古自治区契丹・遼代遺跡の調査

武田和哉・高橋学而・澤本光弘・今野春樹

はじめに

本年度は、中国内蒙古自治区赤峰市管内の市区部、翁牛特旗、巴林右旗、巴林左旗、寧城県内と北京市において、契丹国に関係する遺跡に関して、予備的な調査（遺跡視察、関連機関展示・所蔵資料等の実見）を実施した。次年度以降における契丹関連遺跡の調査計画のための基礎的データの収集を目的としている。調査期間は平成16年8月7日～15日である。調査は、執筆者の4名が行った。現地調査を終えて帰国した後は、データの整理と取りまとめの作業を行った。

調査の受入に際しては、中国人民大学魏堅教授にご協力いただき、訪問先の赤峰市管区内の各機関に仲介頂いた。また、赤峰市博物館研究員馬鳳磊氏には受入担当者として、ご同行いただいた。両氏および、下記機関の関係者諸氏には、今回の調査に際し多大のご助力を賜ったことを心より感謝申し上げます。

訪問機関

内蒙古自治区：翁牛特文物管理所 巴林右旗博物館 巴林左旗博物館 遼中京博物館 赤峰市博物館

北京市：北京遼金城垣博物館 中国石刻芸術博物館

1. 調査遺跡の現状と概要

(1) 都城・城址

新中国成立後、遼代の都城については数多くの調査が加えられてきた。これらについては、李逸友が総合的に考察を行っている「遼代城郭宮建制度初探」他、賈洲杰或いは高橋にも総観した論考が見られる。前者は、遼代の都城を前期の都城の典型として上京臨潢府を、中期の都城として中京を採り挙げているほか、州県城については、前代の城郭を再利用した例、遼代に造営された上級の州城、同じく中級の州城、下級の州城、県城等が外周によって楷梯的に分類されるところから更に一步進んで諸城郭について特徴をまとめている。また、賈は、内蒙古自治区の遼代の諸城について、都城に皇・漢二城、州県城に内外二城の別が見られることを遼代の二元統治体制が顕現化されたものであると理解し、更にこれら諸城郭が後期にあっては関廂の跡が確認されることから遼朝後期に商業経済が活発化したことを主張している。今回は、上京、中京の二都城址に加え、奉陵邑である祖州、慶州、懷州の三州城址、更に富谷館址、或いは勸農県址に充てられる寧県県の黒城古城を視察した。

上京臨潢府跡 内蒙古自治区赤峰市、もとの昭烏達盟巴林左旗の林東の南に位置している。遼神冊三(918)年に皇都として築かれ、天顯元(926)年に拡張、天顯13年には上京と改称され、臨潢府が設置された。城跡については、早く張穆の『蒙古遊牧記』に波羅城と記され、20世紀初頭には烏居龍蔵・桑原隲蔵氏らによって踏査を受け、その後、1939年には田村実造氏ら、1944年には小山富士夫氏によって表面調査と実測が行われるとともに、北城西部で遼代陶磁の窯跡が調査されている。さらに、新中国成立後は、李文信氏が窯跡の調査を行っている。城郭そのものについては1962年に内蒙古自治区文物工作隊によって調査がなされた。なお、1961年には全国重点文物保护单位に指定されている。

上京は大きく皇城と漢城から構成されている。城壁は黄土版築によって築造され、皇城は城壁の現高が9mに達するところも残されている。漢城に接する南壁を除く北壁、東壁、西壁の三面には馬面

が設けられている。皇城は、東壁 1467 m、北壁 1485.8 m、西壁はその北端部と南端部が内折し全長 1844.1 m を測る。南壁は漢城の北壁と重なり、一部パインゴール河に流されているが、長さ 1601.7 m と推定されている。皇城の外周は 6398.6 m となる。また、城門も南門はパインゴール河にあらわれて失われているが、他の三面にはそれぞれ一門が設けられており、さらに甕城が築かれている。今回、皇城北門の洪辰門址から皇城東北隅、更に南下し東門である安東門までを一部城内を横断、また城壁上を歩きつつ踏査し、馬面・甕城の遺構も顕著に残されているのを確認した。特に馬面はお

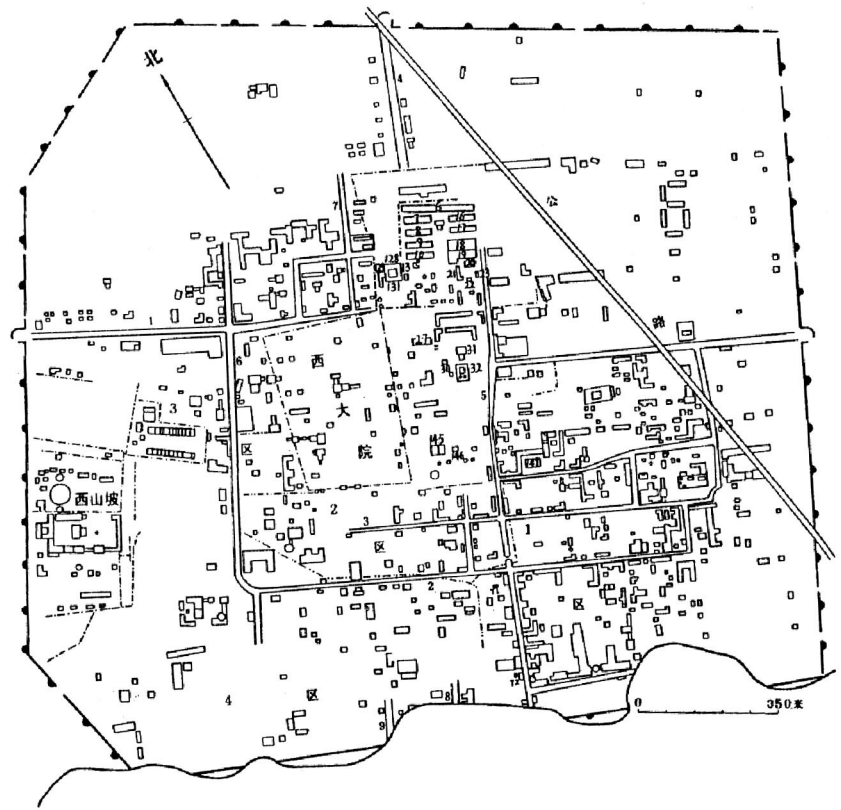


図1 遼上京皇城跡平面図

およそ 80m ～ 100m で設けられており、築造時に於ける弓箭の有効射程についての配慮の必要性を感じた。

皇城内は、東南一帯には官署・邸宅・寺廟・工房などと推測される多くの建築跡が確認されており、中でも天雄寺と推測されている寺廟跡に残る現高 4.2 m の石造菩薩像は早くから注目されているが、観音像の頭頂部は失われ胴部も二つに切断されており、セメント板が補強材とされていた。また、皇城中央には、現高 1 m の囲牆が巡る大内が位置しているが、現在はその地に上京を刻す石碑が建てられている。また、皇城南面に位置する漢城は、現高 2 ～ 4 m、東壁 1290 m、西壁 1220 m、南壁 1610 m の規模を有し、皇城南壁（漢城北壁）を含めず、皇漢二城の外周は 8838.6 m である。城壁には雉、甕城が確認されず、城壁そのものも皇城に比較して、簡陋な構造をしている。『遼史』の記載によれば、漢城内部は漢族・渤海族・回鶻族の居住区であり、現在はパインゴール河の氾濫や浸食によって、さらには、現在漢城の一部は林東鎮小新庄集落が所在しているためその様相が大きく変化しているが、磚瓦片が散布し建築基壇と推定される遺構も一部で確認されている。今後は、『遼史』が記す郭郭の考察も含め、皇漢二城の精査、またさらに皇漢二城の外縁の調査についても配慮せねばならない。

中京大定府跡 『遼史』に従えば、聖宗の遼代中期の統和年間に造営が始められた中京大定府の故城跡は、内蒙古自治区赤峰市寧城県天義鎮の西約 16 km、老哈河北岸に位置している。早く『熱河志』には注目されていたが、実地調査は、明治 42 (1908) 年の鳥居龍蔵以降で、以後、桑原隲蔵、ムーリー、関野貞、竹島卓一、島田正郎らによって踏査されている。その後、1959 年に至って、内蒙古自治区文化局・内蒙古文物工作隊などの諸機関によって遼中京発掘委員会が結成され、同年 4 月から 11 月まで発掘が行なわれ、更に、翌 1960 年 6 月から 10 月に至るまで作業が継続されている。翌 1961 年、同城跡は、全国重点文物保护单位として認められ、その保護が積極的に進められている。

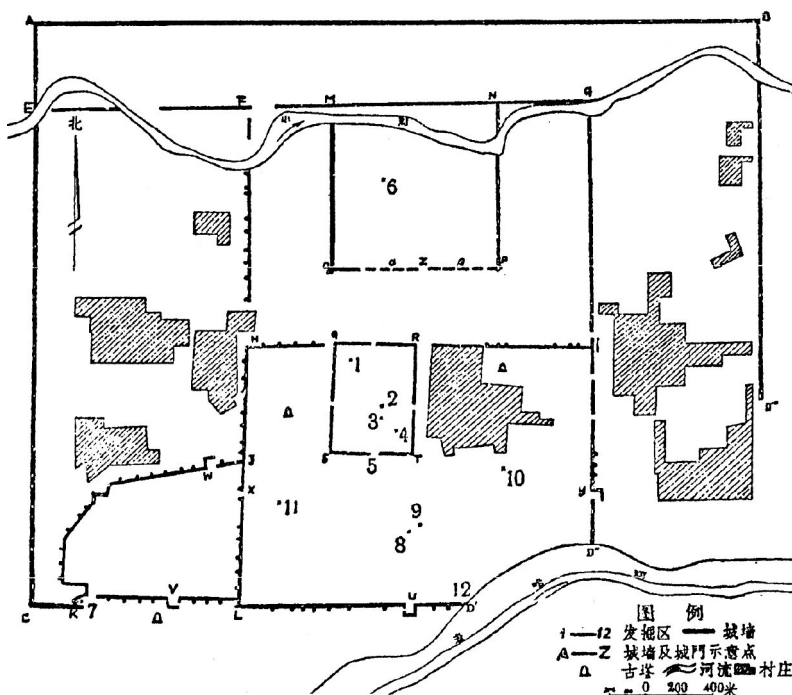


図2 遼中京城址平面図

城郭そのものは、外城・内城・宮城の三重構造を示している。まず、外城は東西 4200 m、南北 3500 m の長方形を呈し、南壁中央に甕城を備えた城門を開き、内城南壁中央に開かれた城門と直線でつながれている。文献史料から前者が朱夏門、後者が陽徳門であることが知られる。朱夏門跡から陽徳門跡の 1400 m 余の間は、幅 64 m の街路が築かれており、街路両側には木板で覆う排水溝も設けられ、その排水溝は朱夏門跡両側城壁下の石製暗渠に直通している。また、朱夏門跡から約 500 m の街路の中央には市楼跡かと推測される馬鞍形の基壇が確認されている。さらに、この街路を中心に左右

には幅 4 ～ 15 m の路面を持つ街路が南北方向にそれぞれ 3 条、東西方向に同じく 5 条発見され、これらが路振の『乗輅録』に記される坊区であると理解されている。今回の我々の調査では朱夏門址を訪れ、その甕城の遺構が今なお明瞭に残されていることを知ることができたが、その開口方向などの一定の規則性に、我が国の枅形に見られる特徴とも重ね合わせ注意が引かれた。また、内城東南隅上からは遼以後に増築された城壁の位置も確かめることができたが、城壁の断面からその版築技法の相異を識別するには至らなかった。その他、外城北部には寺廟・駅館・官署跡の遺跡が確認されているほか、中央の街路を挟んで『乗輅録』に記される廊舎の遺構が検出されている。城内西南部の丘陵上では寺院跡かと推測される方形基壇が発見されている。大定通宝銭など出土品から遼代に建築され金代にあっても機能していたことが推測されている。その他、外城南部、内城南壁には八角密檐十三層の高さ 74 m の磚築の大明塔が、さらにその西南方に高さ 24 m の八角密檐十三層が存しており、遼金建築史の上でも貴重な資料を提供している。次に内城は、外城中央やや北部に位置し、東西 2000 m、南北 1500 m の平面長方形を示している。西壁には馬面が遺存するが、そのほかの三面は、金・元・明代に一部改築されているため馬面を確認し得ない。城内は広闊な空地に占められているのが特徴的である。南壁中央に開かれた陽徳門跡から宮城閤闔門跡までの間には幅約 40 m の通路が設けられている。宮城は内城北部の中央に位置し、北壁は内城の北壁に重なっている。平面は正方形で一辺の長さ約 1000 m である。宮城の東壁、西壁の南端部には角楼跡が確認されるほか、南壁中央には閤闔門跡、さらにその東西 180 m の位置にはそれぞれ掖門跡が発見され、三門から幅 8 m の通路が内城内部に設けられ、その北面には宮殿跡が検出されている。『遼史』に記す「郭郭、宮掖、市肆、廊廡、擬神都之制」の解釈に加え、遼代の都城の坊制の解明などの点で多くの考究すべき問題が確認される。祖州城址 内蒙古自治区赤峰市巴林左旗哈達英格郷石房子村の西方に所在する。上京臨潢府跡の所在する林東鎮からは西約 30 km の位置である。1922 年にカトリック宣教師ミュリー師が報告した後、1943・44 の二年にわたり林東史蹟保存館（主事大内健氏）と東方文化学院により構成された遼代遺蹟調査会によって発掘調査が行われた。城郭は内外の二城から構成されている。外城は方形を意図しながらも地形に制約され不等辺五角形を呈し、全体として東に 60 度振れており、その外周は 1750

mである。現高 3 m、基底部 10 m、頂部 2 mを測る城壁は版築で、地固めの石積などは認められない。城壁上には角楼かと推測される突出部、あるいは、馬面が確認され、さらに、外城の五基の城門のうち、東西北の三面には甕城の遺

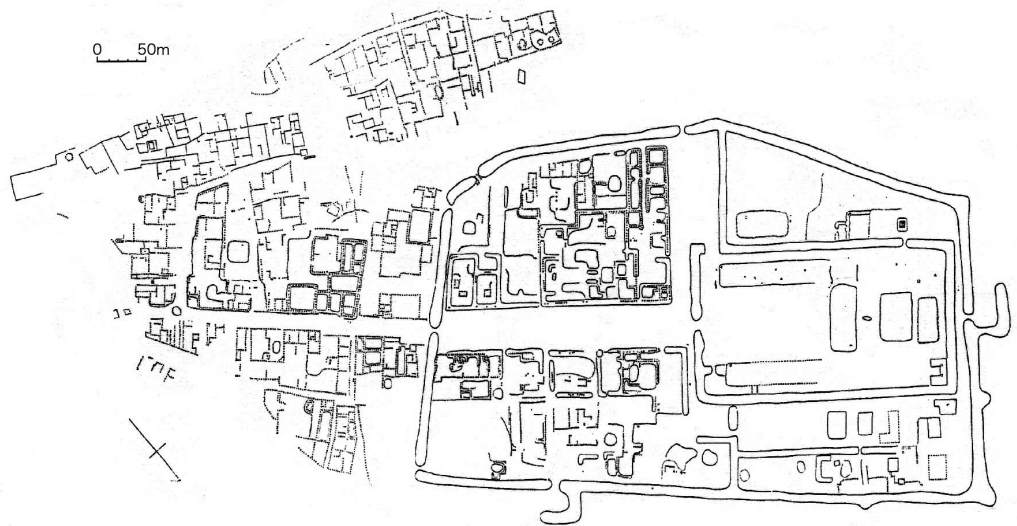


図3 祖州城址平面図

構が残されている。城内は北半部が内城を構成し、南半部は外城南門（大夏門）と内城南門（興聖門）とをつなぐ幅 45 mの大街によって截然と東西二区に分けられており、瓦磚・礎石の出土などから、官吏の邸宅跡かとも推測される建築跡が数多く検出されている。これらは、『遼史』に記す「東長霸県、西咸寧県」の記載に対応するものと考えられている。内城は、南北 295 m、東西 145 mを測り、城壁は外城と同じく版築で築かれている。さらに、内城はおおよそ三区域に分けられ、その内部には宮殿跡に推定されている建築跡、あるいは、祭祀遺構とも推測される大型石室などが残されている。城内からは瓦磚を始め建築部材・陶器片・土器片・鉄釘など金属製品が出土しているが、特に、祖州城が祖陵の奉陵邑として建城される際、渤海国の遺民が徙民されたことと重ね合わせて、蓮弁の瓦当の存在が注目されている。今回の我々の訪問では、内城北門の甕城遺構、東北隅に所在する角楼と、その二者をつなぐ城壁上の馬面などについて調査することができたが、賈洲杰がかつて主張したような内外二城を截然と区別する城壁の存在については季節的に雑草の生い茂る時期でもあり明瞭には確認できなかった。

慶州城址 慶州城址は、内蒙古自治区赤峰市巴林右旗索卜爾嘎蘇木に位置する。その東北方約 10km には慶陵が発見された慶雲山が所在する。慶州について、その存在は早くから知られ、多くの先学の踏査を受けている。城壁は版築で築かれ、内外二重の城壁によって囲郭されている。外城は東西 1550m、南北 1700mを測るが、北壁と西壁の一部を除いてほとんど崩落・削平されている。内城は比較的良好に遺存しており、東壁 1090m、西壁 1095m、南壁 930m、北壁 935mである。各壁中央にはそれぞれ甕城を有する城門各一基が確認されている。城壁上には馬面・角楼が設けられている。城内では、重熙 18 年釈迦如来舍利塔、俗称慶州の白塔が残る他、享殿、官衙址などに推定される大型の建築址が検出されているが未だ正式に発掘調査が進められているわけではない。

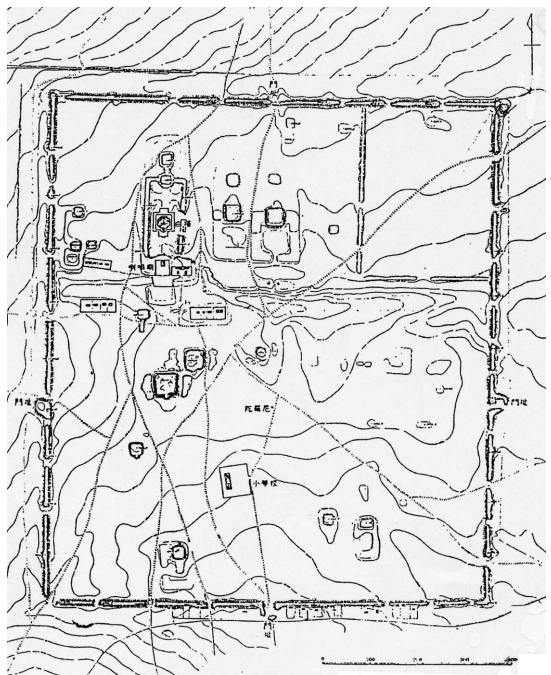


図4 慶州城址平面図

我々は、今回、外城の遺構については確認することがで

きなかったが、内城東北隅部の角楼址、内城西門址の湾曲した構造を示す甕城の構造を実見することができた。城壁は現在でも 6 m 前後の高さを示し、その遺存の状況は上京にも匹敵する。

懷州城址 内蒙古自治区赤峰市巴林右旗幸福之路蘇木の北約 20km に位置する崗崗廟村に所在する。早くに田村実造氏らによって調査され、新中国成立後は昭烏達盟文物站によって数次の調査を受け数々の知見が得られた。同古城は、外周 2000m、平面方形を呈しているが、城壁の崩壊は激しく特に西壁は河流に洗われ失われている。城門は少なくとも南北二門がそれぞれ中央に開かれているが、その痕跡は明瞭としない。四隅には角楼址が確認され、また城内西部を中心として多くの建築址が検出されている。城内からは獣面瓦当、滴水、溝紋磚など遼朝中期を代表する遺物が大量に出土している。今回の調査で我々は北門址を訪れることができたが、甕城の構造もはっきりせず、門址で発見されたという礎石も近隣の民家の敷石に用いられているということであった。また、北門址一帯の城壁は農耕地或いは民家の敷地として削平され現高も 0.5m 前後である。

黒城城址 内蒙古自治区赤峰市寧城県甸子郷黒城村に所在する。故城は、花城、外羅城、黒城の三区画から構成されている。城内からは昭烏達盟文物工作站、寧城県文化館、或いは遼寧省博物館による調査によって、「始建国元年三月」の文字を残す錢範、「漁陽太守章」「白狼之丞」などの封泥などを始めとして、戦国期の燕以来明代に至るまで多くの遺物が出土している。目下、古城は前漢右北平郡治平剛県城、また、遼金代の富谷館、明大寧城に比定されている。外羅城は東西 1800m、南北 900m、黒城は同じく東西 810m、南北 540m、また、花城は東西 200m、南北 280m の規模を有している。城壁はいずれも版築で構成されており、黒城では城壁本体が遼代に築かれ、その外面に元、明代に補修を加えた痕が確認される。我々は雨中に同古城を踏査することとなったが、現高 8m を残すその城壁の外縁をはっきりと視認することができ、また、南門についてもその鉤手状の甕城の明瞭な遺構を認めることができた。南門が城内から見て左手に開放するのは上京同様である。時間的な制約もあり、南門から城内東南部にかけての一帯の踏査に限定されたわけであるが、それでもなお馬面、角台の築造を知ることができた。

(2) 陵墓

赤峰市一帯に所在する遼代の陵墓については、田広林、崔振崗両氏が紹介しつつ総観を試みているように、多くの課題が山積している。比較的異論の少ない慶陵と異なり、特に以下に示すように具体的な例証に乏しい祖陵、懷陵内に於ける個々の墓葬の特定は、乾・顯二陵の比定と並ぶ今後の大きな考究すべき考察対象である。慶陵で陪葬墓の調査が進んでいる現状を重ね併せると、陵墓のそれぞれについてその研究の進捗状況が示す跛行性は顕著である。

慶 陵 遼代の最盛期を現出した聖宗耶律隆緒・仁德皇后・欽愛皇后の永慶陵、遼興宗耶律宗真・仁懿皇后の永興陵、道宗耶律弘基・宣懿皇后の永福陵の総称である。陵墓は、内蒙古自治区赤峰市巴林右旗索博力嘎、慶州城にあてられる白塔子城から西北 14km、俗称王墳溝、モンゴル語ワールインマンハ（瓦の多い砂丘地）の称を有する山地に所在している。三基の陵墓は東西方向に並び、その間は約 2 km で、それぞれ東陵・中陵・西陵と名づけられている。同墓葬は、19 世紀末頃からしばしば盗掘を受けており、1920 年のカトリック宣教師ミュリーの調査以来、同じくケルヴィン、林西知県王士仁らの調査を経て、とくに 1930 年には湯佐栄によって大規模な盗掘が行われ、漢字哀冊・契丹文字哀冊の碑身・篆蓋をはじめ、多くの遺物が搬出され、その多くが現在は失われている。その後、田村実造氏らによって東陵を中心に調査が進められ、皇帝の四季捺鉢図も含む東陵の壁画についても詳細な調査がなされている。さらに、新中国成立後は、汪宇平氏の調査を経て、内蒙古自治区文物工

作隊によって調査が進められている。現在、ケルヴィン報告の哀冊資料などから、東陵が永慶陵、中陵が永興陵、西陵が永福陵にそれぞれ比定されているが、三陵はいずれも磚築で、陵門・享殿・神道を設け、全体として東南に向いている。墓室の構造は、東陵を例にとると、平面方形の前室、円形の中室、後室、および四つの側室から構成され、各室は甬道によって連結され、全長 21,2 m、最も広いところで 15.5 m である。墓内および墓門には石灰を下地に彩色を施した壁画が描かれている。壁画は、四季捺鉢図を含め、龍鳳・花鳥・祥雲・宝珠などの装飾図案や人物画など題材は豊かで、遼代の儀衛・服飾などの点でも多くの資料を提供している。とくに人物画は、個々の外見上の特徴が巧みに表現されており、肩には自筆かと推定される書体や筆法の異なる契丹字の署名が残されているのが特筆される。我々は、今回、東陵の前殿址から東陵に進み、次いで陪葬墓の一つで 2002 年に発掘調査が行われた耶律弘本墓を訪れ、その後、中陵前殿址から中陵へと向かった。残念ながら時間的制約から西陵の踏査は断念せざるを得なかったが、多くの興味深い事実に接することができた。東陵の前殿址では今なお緑釉の筒瓦片が散布しており、また東陵後室の主体部直上の盗掘坑からは磚で構築した室内頂部様子を垣間見ることができた。また、一昨年発掘された耶律弘本墓では発掘後の墓葬上面が全面的に少し 10 ～ 20cm ほど周囲から低く沈んでおり、倣木構造を示す磚彫、或いは、木製品を確認することができた。また、中陵の前殿址やその周囲ではところどころに石造物が見られたが全体的な位置などを確かめるまでには至らなかった。更に、中陵では幸運にも主体部の崩落坑から墓門の構造をつぶさに調査することができた。慶陵については、更なる陪葬墓の存在も予期されることもあり、墓域・陵園全体の調査の必要性を特に痛感している。

祖 陵 遼太祖耶律阿保機の陵墓である祖陵については、早く『遼史』に記載が散見する他、胡嶠の『陷虜記』、さらには『竊憤録』などにも記録されている。現在、その陵墓は、内蒙古自治区赤峰市巴林左旗林東の西約 30km に位置する石房子村の西方約 4 km の山中に所在する墓葬に比定されている。墓葬の東方約 1.5km、石房子村との間に祖州城跡が位置している。墓葬は、1954 年内蒙古文化局によって調査され、その後賈洲杰らの調査を受けている。

陵園は、南に谷を包む山谷を利用して構成され、その全周は 10km 近く、外縁は尾根を利用し、平坦な頂部には高さ 3 ～ 4 m、基底部の幅 2 ～ 3 m の、上端部が尖った石牆が設けられている。陵園はこの石牆によって全周を囲郭されている。陵園内部では、いくつかの円坑状の窪みが確認されているが、中でも、陵園内の谷間の西側斜面の山頂上で発見された円坑は、磚瓦片が散布するほか、前面の台地上には石人など多くの建築跡や遺物が発見されている。従来は、この円坑状の窪みこそが金軍によって破壊された遼太祖を葬った墓室と推測されていたが、今回の調査では、同行した巴林左旗博物館康立軍氏より陵内の小山峰こそが太祖陵であるとの教示を得た。即ち、石人・石狗が麓に発見され（祖陵よりの帰途、本年 12 月に開館予定の遼上京博物館で実見する機会が得られた）、祭祀遺跡に対面する位置にあり、温泉の湧き出る一山峰が人工的に一部築成された太祖の陵墓だと理解するものである。なお、陵門の外、東の斜面上にも遺跡が確認されるが、遺跡内には破損が激しいものの亀趺と碑石が残されており、その破片には契丹文字が刻まれ、本来、碑文には五千字以上の契丹文字が記されていたことが推定されている。

懷 陵 遼太宗耶律德光と穆宗耶律璟の陵墓である懷陵に比定されている墓葬は、内蒙古自治区赤峰市巴林右旗幸福之路の東北約 20 km に位置する崗崗廟村の北約 3 km の床金溝に所在している。奉陵邑の懷州城が早い時期に崗崗廟村で確認されているのに対し、床金溝の墓葬が目されたのは、1976 年に蘇赫と韓仁信らによってである。その後、王建国、孟慶永両氏が略測を行い、1983 年には張松柏らによって調査が進められ、墓葬の基本的な構成が明らかにされている。床金溝は、やや西

によった南北方向の山脈に挟まれており、入口から床金溝の上部までは約9 km弱あり、その間に上営子と下営子の二つの村落がある。 墓葬はこの床金溝の袋状の地形を利用して築かれており、尾根の低い部分や、谷の入口などは石壁を築いている。さらに、内部にも石壁を築いて、全体をより内部の内陵区と、外陵区の二つの構成部分に分けている。内陵区には、墓葬そのものと祭殿が、外陵区には2箇所に大型の建築基壇が確認されている。内陵区の祭殿かと推測されている東西17m、南北13mの建築基壇跡からは、蓮華紋の礎石・鬼面・蓮弁紋の瓦当などが出土している。張松柏ら諸研究者は、懷州城近郊の遼代の墓群の中で、最も規模が大きく、その立地が、尾根を利用しつつ外周を構成し、谷間に墓葬を設けるという遼代陵墓の型式を踏襲していること、漢白玉蓮華紋礎石などが慶陵で出土していることなどから、床金溝の墓葬を懷陵であると理解している。今回の我々の調査に同行した赤峰市博物館の馬鳳磊氏からは、陵園内で発掘された5号陵をその風水的な観点から穆宗陵に推定し、6号陵を太宗陵に充てる現地の研究者の見解を紹介して頂いたが、今後の調査に待たねばならない。

(3) その他

遼上京周辺窯跡 上京周辺には窯跡がいくつか見つかっている。今回訪れたのは、上京内の北西にある窯跡と、上京の南方にある南山窯跡の2箇所である。いずれの場所ともに、地表面上にて陶器の破片が散乱しているのが目視できたが、窯跡の所在を示す案内板などはなく、案内人がいなければその存在に気付くのは困難であるかもしれない。なお、上京付近の窯跡については、三上次男等の論考がある。それによると、上京内北西部の窯跡からは定窯に近い白磁を生産していたことが推定されている。また、南山窯址は緑釉や褐釉などの陶器が焼成されていたとされる。

善福寺（真寂之寺） 林東から南へ約30 km程度行ったところにある桃石山の山腹にある石窟寺院で、「后召廟石窟寺」として内蒙古自治区の重点文物保護單位に指定されている。開削を始めたのは契丹国時代であるとされ、現在は石窟の前には清代に建立されたチベット仏教系寺院がある。『遼史』には、時に「弘福寺」あるいは「開化寺」という名称がみられ、これらをこの善福寺に比定する説もある。

2. 総括と展望

今回は視察した都城・城址は、懷州城を除くと、概ね城壁の残存状況は比較的良い印象を受けた。しかし、近年の中国の経済成長に伴う都市化や開発の増加のため、間近まで建築物が迫っている例が多くみられ、なるべく原地形が良好に残っている内に測量等の現地調査を行う必要がある。特に、詳細な図面を作成し、地形図、高度情報、過去に撮影された航空写真や衛星写真等と併せて、都城の構造や城内の様相を分析・把握することにより、各都城内部の構造や坊制等の解明が進むと思われる。GISがそのための、有効なツールとなると思われる。さらには、東アジアの各都城遺跡との比較研究によって、契丹国の都市や都城の様相や特徴を把握できるのではないかと考える。特に、上京などの都城では、宮殿内の構造の復原を行い、文献に見える官署名や殿院名等との対照を行うことで、当時の宮廷内の空間的な把握に迫れる可能性もあろう。いずれにしても、契丹・遼代都城・城址の本格的な考古学的研究はまだ行なわれていないといってもよい。今後、文献史学・情報科学・地理学などとの学融合的研究により得られる成果はきわめて大きいと考えられる。

また、今回訪れた慶陵・懷陵・祖陵などの皇帝陵や、韓氏一族墓や耶律羽之一族墓などは、契丹国時代の墓制を考察する上では非常に重要なフィールドである。特に、慶陵などでは最近陪陵がいくつか発見され、その墓主が皇帝に近い皇親であることが判明している〔耶律弘本墓〕。同様なことは、

懷陵でも指摘することができ、域内で複数の陵墓が確認されている。これらの陵墓に関しては、地中探査等による調査もひとつの有効な手段と言えよう。但し、懷陵については近年近隣に農村が出現し、農地開墾などが陵墓近接地まで迫っているという状況があり、今後の動向次第では遺跡保存が懸念される可能性があり、調査が早急に必要である。

この他に、窯跡等の生産遺跡や、慶陵の北東にある「黒山祭祀遺跡」など、契丹国の実態を知る上で重要な遺跡が多数存在している。今年度調査したのは、赤峰市域の一部にすぎず、他の行政区やモンゴル国領内なども含め、遺跡や資料展示施設等が多くあり、今後とも継続した調査・視察を通して、現状の確認や考察が必要であると考え。また、今回訪れた遺跡の中には、なるべく早期に様々な見地から集約的な調査を行う必要があると感じられた遺跡がいくつかあった。これらについては、今後現地調査機関とも共同で詳細な調査を継続的に行うことが肝要と思われる。

さらに、展示施設や研究施設等には、未報告の遺物や資料が数多く蓄積されており、こうした資料についても現地機関との共同作業によって、多くの研究者が利用可能な成果として公開していくことの重要性を認識した。

参考文献

(邦文)

斎藤菊太郎 1941「林東所見－遼三彩の確認と一古窯址の発見」『陶磁』12-4

島田正郎 1956『祖州城－東蒙古モンチョックアゴラに存する一遼代古城址の考古学的歴史学的調査報告』中沢印刷

高橋学而 1987「中国東北地方に於ける遼代州県城－その平面構造、規模を中心として－」『東アジアの考古と歴史』上巻,280～324頁

竹島卓一 1937「遼の上京城址」『東洋建築』1－1

竹島卓一 1940「遼の中京城址」『東方学報』11－1,209～222頁

田村実造・小林行雄 1953『慶陵』I・II(京都大学文学部 座右宝刊行会)

三上次男 1981「渤海・遼・金・元の陶磁器生産とその歴史的背景」『世界陶磁全集13』小学館

(中文)

陳文彦 2003『遼都神韻』内蒙古人民出版社

馮永謙・姜念思 1982「寧城県黒城古城址調査」『考古』1982－2,155～164頁

賈洲杰 1979「遼金元時代内蒙古地区の城市和城市経済」『内蒙古大学学报』哲学社会科学版－3・4,162～169頁

1984「内蒙古昭盟遼太祖陵調査記」『内蒙古文物資料』,196頁

李逸友 1987「遼代城郭宮建制度初探」(陳述主編『遼金史論集』第三輯,45～94頁

李文信 1958「林東遼上京臨潢府故城内窯址」『考古学報』1958－2

李作智 1988「論遼上京城的形制」『中国考古学会第五次年会論文集・1985』,128～134頁

遼中京発掘委員会 1961「遼中京城址発掘的重要収獲」『文物』1961－9,34頁

内蒙古文物考古研究所 1994「遼上京城址勘査報告」内蒙古文物考古文集1,中国大百科全书出版社

内蒙古自治区文物工作队 1961「遼中京西城外的古墓葬」『文物』1961－9,40頁

内蒙古自治区昭烏達盟文物工作站 1980「遼中京遺址」『文物』1980－5,89頁

蘇赫 1987a「遼中京」『松州学刊』1987－4/5,23～31頁

蘇赫 1987b「遼祖州城和祖陵」『松州学刊』1987-4.5,122～123頁

- 田広林・崔振崗 1989「赤峰地区遼陵述論」『昭烏達盟蒙族師專學報』1989－2,40～48 頁
- 王晴 1987「遼上京遺址及其出土文物記述」『松州學刊』1987－4,5,14～22 頁
- 昭烏達盟文物工作站・寧城縣文化館 1977「遼寧寧城縣黑城古城王莽錢範作坊遺址的發現」『文物』1977－12,34～43 頁
- 張松柏 1984「遼懷州懷陵調查記」『內蒙古文物考古』第3期,67～72 頁遼寧省巴林左旗文化館「遼上京遺址」『文物』1979－5,79 頁
- 張郁 1958「內蒙寧城縣古城址的調查」『考古通訊』1958－4,60 頁

平成 16 年度モンゴル国ゴビアルタイ地方現地調査報告

村岡 倫

はじめに

本研究「中世北東アジア考古遺跡データベースの作成を基盤とする考古学・歴史学の融合」は、文部科学省特定領域研究「中世考古学の総合的研究」の情報システム論研究部門 D 01 公募班として、本年度より採択された。研究組織は下記の通りである。

研究代表者 村岡 倫（龍谷大学文学部助教授）
研究分担者 徐 光輝（龍谷大学国際文化学部助教授）
松田孝一（大阪国際大学経営情報学部教授）
松川 節（大谷大学文学部助教授）
研究協力者 桶谷猪久夫（大阪国際大学人間科学部教授）
白石典之（新潟大学人文学部助教授）

初年度に当たる本年度は、遺跡データベースのための情報収集のため、モンゴル国西部のゴビアルタイ地方において遺跡調査を実施した。調査期間は 2004 年 8 月 26 日～9 月 13 日であり、うち、アルタイ方面での調査は 8 月 31 日～9 月 9 日であった。

1. モンゴル国西部の調査の意義

本年度の調査報告の前に、モンゴル国西部ゴビアルタイ地方の調査がどのような意義を持っているのかということについて、そして、これまでの調査と研究成果について、具体的に述べておきたい。

モンゴル帝国時代初期、モンゴル高原では、チンギス・カン即位にともなって全遊牧民が千戸集団に分けられた。その千戸集団は、チンギス・カンが直轄する中央ウルスのほか、チンギス・カンの諸子が形成する西方アルタイ山脈方面の右翼ウルス、諸弟が形成する東方興安嶺方面の左翼ウルスにそれぞれ振り分けられている。また、中央ウルスは、さらにその内部で 1 万の近衛軍団を中心にはさんで、ジャライル部のムカリ率いる左翼集団、アルラト部のボオルチュ率いる右翼集団に分かれていた。この形態は、チンギス・カンの祖法として、その後も長く遵守された。

従来、モンゴル高原で発見されたモンゴル時代の遺跡について、その発見地から、上記の中央・左翼（東方）・右翼（西方）の各ウルスに分けて考えると、中央ウルスでは、本特定領域研究 C01「北東アジア中世遺跡の考古学的研究」（代表：臼杵勲）により、研究分担者の白石典之（新潟大学人文学部助教授）が中心となって調査を進めている。ケルレン川流域のチンギス・カンの大オールドであるアウラガ宮殿趾、第 2 代オゴデイが建設したカラコルムの都市遺跡およびカラコルムを中心とした首都圏の各遺跡、漢人軍団の駐屯地であった宣威軍城趾など、数多くの遺跡が確認、発掘され、詳細な調査研究が行われてきた。中央ウルスの左翼千戸集団の中では、コンギラト部の夏都として知られる、現内蒙古自治区東部にある応昌路古城に関しても詳しい調査報告がある。

さらに、東方の左翼ウルスの地域に関しては、チンギス・カンの弟、ジョチ・カサル王家の冬宮であったと考えられる黒山頭古城（かつて日本人やロシア人によって成吉思汗城と呼ばれた）があり、これについても詳しい調査報告・研究があり、アルグン河左岸に残るヒルヒラ城趾群、クンドウイ城趾もカサル王家の所有であった可能性が高いという。

このように、これまでのモンゴル時代に関わるモンゴル高原の遺跡は、中央ウルスの中心カラコルムおよびその周辺、中央ウルスの左翼千戸集団が展開する地域、ないしはチンギス・カンの諸弟の左翼ウルスに所属するものがほとんどであり、中央ウルスでも右翼千戸集団の地、あるいはアルタイ方面のチンギス・カン諸子の右翼ウルスの地域、つまりモンゴル高原西部では、モンゴル時代の遺跡が全く発見されていないという状況であった。

そのため、本研究により、特に情報の少ない右翼ウルスの地モンゴル西部において、遺跡を調査しデータベースを作成するとともに、考古学と文献史学の協業からそれぞれの遺跡の性格を明らかにしていくことで、北東アジア史に大きく貢献することができる。

2. これまでの調査と研究成果

しかし、本研究の代表者である村岡、研究分担者の松田・松川、前述の白石は、2001 年度に独自の調査を進め、モンゴル＝元朝時代の文献史料に散見し、モンゴル西部にあったということだけは確かであるが、いまだその位置に関しては定説がなかったチンカイ（称海）屯田や五条河屯田の地として可能性の高い候補地を発見した。特にチンカイ屯田の位置に関しては、唯一具体的な記述を残している『長春真人西遊記』に記される屯田周辺の景観と、ゴビアルタイ県シャルガ郡内農耕地跡の周辺の景観とがほぼ一致していた。シャルガ郡は、モンゴル国の首都ウランバートル市の西南西 880km の距離にあり、五条河屯田はその北方ハサクトハイルハン山地北側のザブハン川流域に位置している。シャルガの農耕地跡からは、チンギス・カンの大オルドであるアウラガ宮殿跡で発見されたものと同種の金代 12 世紀末～13 世紀初頭の鈎窯の磁器片を発見、その他、モンゴル時代のものと考えられる土器片も多数発見したことによって、この地はチンカイ屯田である可能性が高いと考えた。その後、他の文献での裏付けを行ない、この比定に間違いはないことを確信したのである。松田は大阪国際大学を通じて各新聞社に発表し、記者会見の後（記者会見には村岡・松川・白石も出席）、2003 年 4 月 15 日付朝刊で各紙はそのことを報じている（毎日新聞は 17 日朝刊）。また、松田は読売新聞にチンカイ屯田の調査に関する記事を寄稿し、それは東京版 5 月 14 日付夕刊の文化欄に載った。

チンカイ屯田は、モンゴル高原から中央アジアへ向かうモンゴル側の最前線の軍事拠点として知られている。チンギス・カンの西征はこの地を拠点として行なわれ、元代においても、中央アジアのモンゴル勢力に対する元朝側の最前線基地となった。

チンカイ屯田、五条河屯田が位置する地域は、初期モンゴル国家の形態から言えば、中央ウルスの右翼千戸集団の地、あるいは右翼ウルスの地に当たる。前述のように、これは従来、ほとんどモンゴル時代の遺跡の発見もなければ調査もされていない地域であっただけに、この発見は重要であると言える。なお、村岡は、2001 年度の調査に関して論考をすでに発表している（「モンゴル西部におけるチンギス・カンの軍事拠点—2001 年チンカイ屯田調査報告をかねて—」『龍谷史壇』第 119・120 号、2003 年 3 月発行）。

しかし、両屯田は発見した折に表面調査を行なったのみで、本格的な調査はまだ行なっていなかった。また、その調査後、シャルガの農耕地跡の航空写真を入手したが、分析の結果、我々が表面調査を行なった地の東方 1km 辺りの地点に、人工的な土城が写っていることが確認された。それは、一辺が約 190 m の正方形で建造されており、元代（1260 年～1368 年）のものである可能性が高いと思われた。すなわち、この土城は 1270 年代～1340 年代前半に使用された 1 尺＝31.6 cm、1 里＝1200 尺の元尺で、一辺 0.5 里（600 尺＝189.6 m）、周囲 2 里（2400 尺）でつくられていると考えられたからである。チンカイ屯田には「チンカイ城」も造られたと史料にあり、この土城がそれに当

たのではないかとされた。したがって、土城の確認と調査は本年度の最重要課題であった。また、13年の調査ではいくつかの疑問も残され、本年度の調査はそれらを明確にする目的もあった。

3. 本年度調査の参加者と日程

参加者は松田孝一を隊長に、村岡倫・松川節・白石典之、他は次の通りである。

中田 裕子（龍谷大学大学院博士課程）

鈴木 宏節（大阪大学大学院博士課程）

宮尾 美穂（新潟大学学部生）

A. オチル（モンゴル国国立歴史民族博物館館長）

エンクトル（モンゴル科学アカデミー考古学研究所）

エルデネボルト（ロシア科学アカデミー、モンゴル・チベット仏教研究所）

オユンジャルガル（東北大学大学院博士課程）

調査日程は2004年8月26日～9月13日で、うちアルタイ方面での調査は8月31日～9月9日であった。以下、調査内容の概略は下記の通りである。なお、調査の詳細な行動記録については鈴木宏節・中田裕子がすでにまとめており、改めて発表する予定である。

- 8月26日 午前 松田・村岡・中田・鈴木、関西国際空港より出発・フライト
午後 中華人民共和国、北京到着
夜 すでに中国入りし、別調査を終えて北京に滞在中の松川と合流
- 8月27日 午前 北京空港より出発・フライト
午後 ウランバートル、バヤント＝オハー空港に到着、白石・宮尾と合流
- 8月28日 午前 歴史民族博物館訪問、オチル、エンクトルと調査の打ち合わせ
午後 調査の準備
- 8月29日 午前 アウラガ遺跡（チンギス・カン宮殿址）見学に出発
午後 到着後、白石の解説のもと見学
夜 近くのツーリストキャンプに宿泊
- 8月30日 午前 ツーリストキャンプ近くの野外博物館「ナイマン＝チャガン＝ゲル」見学
その後『元朝秘史』成立の地、コデエ＝アラル（川中島）へ
午後 トゥブ県エルデネ郡ブールルジュート遺跡を経由してウランバートルへ
- 8月31日 早朝 バヤント＝オハー空港よりフライト、アルタイ空港へ
午前 アルタイ市で昼食後、シャルガ郡内の遺跡（チンカイ屯田）へ出発
午後 遺跡に到着、航空写真に写っていた土城発見、測量、表面調査
多数の遺物発見
- 9月1日 午前 土城内外の調査および近隣の遊牧民への聞き取り調査
午後 遺跡南方の巨大な砂山、テブフ＝トルゴイおよびその周辺を調査
- 9月2日 午前 引き続き現地調査
午後 遺跡西方のシャルギン＝チャガン湖東南のタヴァン＝トルゴイ調査
- 9月3日 午前 シャルガ遺跡出発、西へ、アルタイ山脈越えに向かう
午後 トンヒル郡の中心の町から南下、アルタイ山中へ

- 夜 タムチ＝ブリガード（今はゴーストタウン）近くで野営
- 9月4日 午前 聞き取り調査 ワゴン車故障のため足止め
午後 ワゴン車をあきらめ、新しいトラックをトンヒルの町で雇い入れる
- 9月5日 午前 さらに南下、タムチン＝ダヴァー（峠）越え
その後もいくつかの峰を越える 突厥時代の石人を有する祭祀遺構調査
午後 アルタイ山脈を南へ越える 聞き取り調査の後、アルタイに沿って東へ
再びアルタイを越えるために北東へ ボガド郡を通過、アルタイ山中へ
- 9月6日 午前 アルタイ山脈を北へ越える トウグルクからオロンボラクへ
午後 ハリオンからビゲルへ
- 9月7日 終日 ビゲル遺跡の調査 遺物発見
- 9月8日 午前 ビゲル出発、南方の山中、突厥文字のある岩壁に到着
午後 突厥銘文の周囲には動物の岩絵も数多くあり 調査
ビゲルの町の造酒工場訪問
夜 アルタイ市南方のツーリストキャンプで宿泊
- 9月9日 午前 アルタイ空港からフライト
午後 バヤント＝オハー空港に到着 日本大使館訪問
- 9月10日 午後 歴史民族博物館訪問 博物館所蔵の石碑調査
午後 モンゴル科学アカデミー考古学研究所訪問
夜 ウランバートルホテルで調査の成功を祝っての晩餐会
- 9月11日 早朝 白石・宮尾帰国、成田空港へ
午前 松田・村岡・松川・中田・鈴木、バヤント＝オハー空港よりフライト
午後 北京到着
- 9月12日 終日 各自、北京市内の史跡・博物館等の見学
夜 別科研で北京入りした森田憲司（奈良大学文学部教授）・桂華淳祥
（大谷大学文学部助教授）・松浦典弘（大手前大学人文科学部助教授）と合流、共に
中国の元代研究者たちと会合
- 9月13日 午前 松田・村岡・中田・鈴木、北京空港よりフライト、松川は別科研の調査のため、桂華・
松浦と共に空路山西省へ
午後 関西国際空港到着 解散

4. 本年度の研究成果と今後の課題

本年度の調査では、平成13年の調査で残された疑問はかなり解消できたと言える。『長春真人西遊記』には、チンカイ屯田の西には湖があり、その傍らに「風冢」というものがあつた、と記されている。前回の調査で、確かに農耕地跡の西にシャルギンチャガン湖という湖があることを確認したが、「風冢」をどう考えるか課題であつた。今回の調査で湖の東南の傍らに、現地で「タヴァン・トルゴイ」（5つの丘）と呼ばれる小さな丘が連なるのを発見し、現地の人々から通称で「セルーフン・サルヒン・トルゴイ」（涼しい風の丘）と呼ばれていることを確認した。「風冢」に間違いはないであろう。

また、『長春真人西遊記』に、チンカイ屯田の南にあつたと記されている「阿不罕山」も前回の調査では確定し得なかったが、今回の調査で、農耕地跡の南方に位置し、シャルガ郡一帯のどこからで

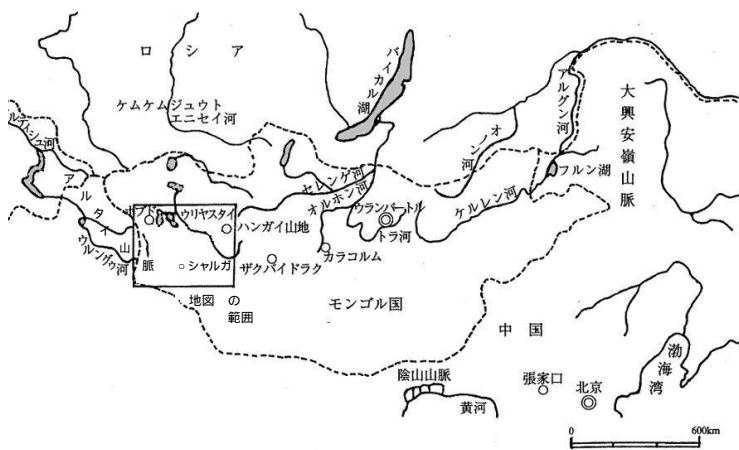


図1 モンゴル地図

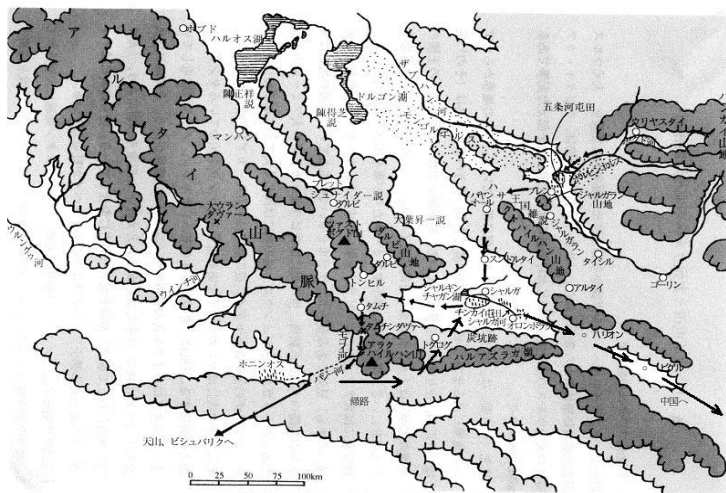


図2 シャルガ周辺地図

は弘州（現在の河北省陽原県）を領地としており、この地にはチンカイ配下の工匠が居住していたという。弘州とその北東の蕞麻林（現洗馬林）には、モンゴル時代に納失失（ナシージ）織り（西方に由来する金刺繍の絹織物）の製造局が設立され、ケレイト系の軍官管理のもと、納失失織りの製造が行なわれていることがわかっている。また、ペルシア語史料の『集史』では、チンカイをウイグル人としていることもよく知られている。チンカイの出自に関連して、彼と「阿不罕氏」やケレイト部、あるいはウイグルとの関係は今後も検討すべき課題であろう。

そして、本年度調査の最大の課題であった航空写真に写っていた土城は、シャルガ農耕地の東で確認できた。土城の表面調査で、前回と同種の金代12世紀末～13世紀初頭の鈎窯の磁器片を多数発見したこともあり、これがチンカイ城である可能性が高いと我々は考える。しかし、モンゴル時代以前のものと思われる土器片も多数発見した。また、航空写真を分析しただけの段階では、土城は元尺で建造されていると推定したが、実測すると、土城は一片188mであり、これは、元尺あるいはそれより前の宋尺・唐尺とも合わず、唯一、1尺=23.5cmの漢尺で800尺ぴったりになる。しかし、漢の城で800尺という類例はなく、建造年代については今後も調査検討が必要である。いずれにしても、モンゴル時代以前の遺物の発見、尺が元尺ではなく、それ以前のものである可能性があること、これらのことから、チンカイ城は、モンゴル時代に初めて建造されたのではなく、それ以前からあったものを再利用したのと考えられよう。

チンカイ地域は、5世紀の高車国の根拠地であり、6世紀成立の突厥の発祥地でもあるアルタイ山脈南斜面に隣接する地域であって、13世紀以前のモンゴル高原史においても重要な存在であったこ

も見える目立つ山肌を有するチャガンハイルハン山に比定できると考えた。チンカイ屯田とは、チンギス・カンの功臣チンカイ（田鎮海）が開いたことによってそう呼ばれているのであるが、彼の出自に関しては多くの説がある。ウイグル人説、ケレイト部出身説、オングート部出身説などであるが、文献精査の結果、「阿不罕山」の「阿不罕」とは、金朝においては女真人の由緒正しい名門氏族の名称であることがわかった。「阿不罕山」の名はこの氏族名に因んだと思われる。そして、「阿不罕氏」が漢姓を名乗る時には「田」姓を使用すると史料に明記されており、チンカイの姓もこの「田」なのである。チンカイ屯田には、金朝治下の北中国から多くの漢人農民や職人が移住させられている。チンカイがすぐさま女真人ということにはならないかもしれないが、関係の深さがうかがえる。

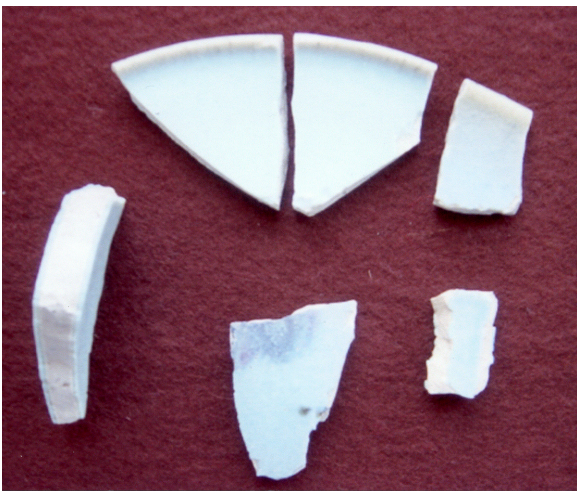
一方では、ケレイトとの関係をうかがわせる事実もある。チンカイは、漠地で

とが考えられる。また、東西交通路上の枢要な場所として、チンカイ屯田は唐代から存在した回鶻路の途上につくられた可能性を本年度の調査以前から我々は想定してきたが、今回の調査・発見により、そのことが裏付けられたと言える。

また、本年度は、長春真人一行のアルタイ越えのルートについても調査を行なった。『長春真人西遊記』に記される旅程に沿って、我々もアルタイ山脈を南に越え、また、別なルートで南から北へアルタイを越えて引き返してきた。その結果、長春真人一行のアルタイ越えのルートをほぼ確認した。もともと、アルタイ山北麓には、先史時代からの数多くの遺跡が発見されているが、今回の調査でも、アルタイを越える直前の地にも突厥時代の石人を有する遺跡、その他各時代の遺跡も見ることができた。この地が古くから重要な交通の要衝であったことが認められよう。

さらに、その後、我々は、シャルガ郡の東南ビゲル郡に遺跡があるというモンゴル側の情報をもとに調査した結果、モンゴル時代以前のものと思われる（契丹・遼時代と並行の時代か？）土器片を多数発見した。モンゴル高原の他の地域ではほとんど例がないものであった。モンゴル時代以前にこれらの地を制圧していた勢力とは何かということが今後の課題となろう。

シャルガからこの地に至るルート（オロンボラク～ハリオン～ビゲル）は、『長春真人西遊記』に記される長春真人一行が中国方面へ帰るに当たって東南行した道中の景観と一致し、一行はこの道を通して帰還したと考えられる。また、ビゲルの南方の山中（北緯45度33分23.7秒、東経97度09分13.9秒、高度2066m）の岩山に「キュリ某のユルト（天幕）」という突厥文碑銘（大阪大学・鈴木宏節解説、730年代以降～9世紀半ばのもの）をはじめ、その他、各時代の碑銘もあり、この地も交通の要衝であったことが考えられ、今後の調査が必要であろうと思う。



シャルガ採集鈎窯磁器片



調査風景

クビライ政権時代のチンカイ地区（筈記）

松田孝一（大阪国際大学）

はじめに

チンギス・カン時代に開発された西モンゴル、アルタイ山脈東方のチンカイ城（＝バルガスン）、付近の農業・手工業生産基地（屯田）について、これまで大葉昇一氏の専論¹⁾や筆者の言及²⁾など多くの研究があるが、まだその城の正確な位置については発掘調査がないために確定されていない。村岡倫（龍谷大学）を代表とするわれわれの研究組織は、2001年以来、西モンゴル、ゴビアルタイ地区を踏査し、位置確定の調査を続けており、その概要については村岡の研究がある³⁾ので、以下では、チンカイ地区の歴史・地理的情報に関して、特に、クビライ政権期のチンカイ地区について、今年度整理した点について報告しておきたい。

1. クビライ政権発足後のチンカイ地区

クビライは、1260年以来、アリク・ブケとカン位をめぐって抗争し、1264年アリク・ブケ派諸勢力がクビライ側に投降して抗争は終結した⁴⁾。翌1265年1月に、チンカイ、バイバリク、ケムケムジュートというモンゴル高原西部の3地方都市の諸種技術者を中都へ移住させている⁵⁾。この数ヶ月前の1264年7月庚子には、クビライは、アリク・ブケ派のウルン・タシュ、アスタイ、シリギ（以上モンケ家の一族諸王）を助命する一方、不魯花、忽察、禿満、阿里察、脱忽思などの重臣たちを処刑して抗争に結末をつけた⁶⁾。それと関わってモンゴル高原の上記3拠点都市の技術者を自派の本拠である中都へ移動させ、アリク・ブケ派の生産力を根こそぎにしたのであろう。チンギス・カン時代以来農業・手工業生産基地として機能を果たしてきたチンカイの手工業生産力は失われたのではないかと考えられる。

2. 元朝のチャガタイ領侵入の後方基地

次にチンカイ地区が史料に現れるのは、1270年のことである。

『元史』115、裕宗伝に、

（至元）七年秋、受詔巡撫称海、至冬還京。間謂諸王札剌忽及從官伯顔等曰、吾属適有茲暇、宜各悉乃心、慎言所守、俾吾聞之。於是撒里蛮曰太祖有訓、欲治身、先治心、欲責人、先責己。伯顔曰皇上有訓、……。

とあり、この年の秋に裕宗（チンキム）がチンカイを巡撫したと記されている。この巡撫に従ったものとして、札剌忽（チャラク）、撒里蛮（サルバン）、伯顔（バヤン）の三人の名が見える。チャラクはチンギス・カンの弟オッチギンの孫⁷⁾、サルバンはウルン・タシュの子、モンケ・カアンの子である。別史料からこの巡撫には、鷹匠部隊の万戸の八丹が随行していることがわかる⁸⁾。いずれの記述からも、ジンギスのチンカイ巡撫が何を目的にしたのかは窺いえない。

ただ、ここで注目されるのは、翌年中央アジア、天山山中のチャガタイ家の本拠アルマリクへ侵攻した元朝側の皇子ノモガンの動きである。ノモガンはチンキムの弟であり、これに先立つ1265年に北平王に封建され、モンゴル本土に派遣された。そして、1271年には、上記のチャラク、サルバンをはじめ、シリギ、ヨブクル、メリク・テムル、トク・テムル、ウルクダイ、ヤクドなどの同族諸王やアントム・ノヤンを筆頭とする将軍を従えて中央アジア遠征に向かった⁹⁾。

チンキムのチンカイ巡撫を伝える記録には、当のノモガンの顔は見えないが、モンゴル高原から西

へアルマリクへ進む経路にある拠点のチンカイ地区に、遠征の前年にノモガンがいなければならないはずである。従者として付き従った東モンゴルを封地とするオッチギン家のチャラク、従者として付き従いながら後に反乱を起すサルバンが、そこに姿を見せている以上、このチンカイでの会合は、ノモガンの中央アジア、アルマリク遠征の出陣式の如き集まりであったと解すべきであろう。

チャラク、サルバン、八丹（万戸）3名の諸王、将軍だけでも相当の兵員を引き連れていたものと解され、それ以外にノモガン配下の多数の諸王、将軍などもまた兵員を率いての会合となれば、膨大な人数が、チンカイ地区に集結していたことになる。

同年の6月つまり、夏の終わり、上記のチンカイ集結の1ヶ月前、元朝政府は、ノモガンに馬6,000頭、牛3,000頭、羊10,000頭を与えている。同時に北辺（つまりモンゴル高原辺境と解する）の鎮戍軍に馬20,000頭、牛1,000頭、羊50,000頭という膨大な家畜を支給している¹⁰⁾。おそらくは、この家畜の支給は翌年のノモガンの中央アジア遠征に向けてのものと考えてよからう。相当に広大で緑豊かな空間でなければこれらの大部隊と畜群の集結は不可能であったと思われ、この集結の記事は、チンカイ地区の豊かな景観を示唆していると言えるであろう。

1271年にアルマリクに到着したノモガンの大部隊は、1276年になると、諸王トク・テムルの画策でいわゆるシリギ（モンケの子）の乱が起こり、アルマリク進駐軍は解体し、中央アジア全域～モンゴル高原全域が大混乱に陥った。モンゴル本土奥深くまで反乱軍の侵攻を許した元朝政府は、南宋遠征の将軍バヤンを1277年にモンゴル高原に派遣したほか、その配下で1278年に元朝側のキプチャク軍団のトクトガがアルタイを越えて攻撃し、劉国傑も1万人の漢人部隊を率いて1278年に派遣され、1279年に一時はアルタイ方面にまで進軍した後、カラコルムに戻り、そこに屯田した。元朝側は、同年ハンガイ山中、カラコルム西南のハン・ホクシン山の3本の尾根に「宣威軍城」を建設して西への防備を固めた¹¹⁾。この時期、チンカイ地区が元朝の勢力圏として保持されていたか、いなかったか何の記録も見出せない。

1280年に反乱画策者であった諸王トク・テムルがシリギによって殺され、ようやく下火になる。1281年にはサルバンが、シリギやヨブクルを捕らえて元朝に降った。しかし、ヨブクルは元朝へ送られる途中で脱出して、以後1296年まで元朝の支配から離れたままであった。付随してアルマリクへ出ていたモンゴル高原の千戸集団は、輜重としての家族群も相当数伴いつつ、モンゴル高原へ当面復帰することなく、アルタイ方面に移住した形になっていたと思われる¹²⁾。

3. ノモガンのモンゴル高原帰還後の情勢

1282年正月にノモガンはシリギの乱の終息を、諸王チャラクを元朝に派遣して伝えた。ジョチ家に捕らわれの身であったノモガン自身はこの時点で釈放され、ノモガンは同年北平王から北安王へ王号が改められている。ノモガンは、1284年には、タミル河方面（トルイ家固有の遊牧地）に駐屯し、ケルレン河の大オルド、スルドス部族などを保持していた¹³⁾。北安王ノモガンは、時期不明ながら、帰還以後にまたまた反乱に遭遇してオルコン河で再び捕らわれの身となりアルタイ方面まで拉致され、その地で玉哇失が諸王ヨブクルらと協力してノモガンを救出した事件があった¹⁴⁾。

1284年にやはり抑留されていたアントム＝ノヤンも釈放されて帰還した。それに対応した処置なのかモンゴル高原に丞相ドルドカなる将軍（もともとアリク・ブケ派）が派遣されて、現地で軍事関係を取り仕切るようになる。ドルドカは、同年、諸王ヤクド、将軍トクトガらがカイド軍と戦って功績のあったことを元朝政権に報告している¹⁵⁾。

1285年には、五条河に屯田が開かれている。五条河屯田はおそらくザブハン河の方面にあったと

考えられ、この屯田の要員はカラコルムの屯田を移動させたものであったから、元朝勢力圏はハンガイより西へと拡大して行ったものと見られる。この拡大は、ノモガン、アントムの帰還で、アルタイ方面の緊張関係が緩んだ結果であったと考えられる。元朝勢力圏は、この時アルタイ方面まで拡大していた。1286年、カイド兵がアルタイに侵攻してきたので、ドルドカとトクトガが出て、防衛に当たった¹⁶⁾。

カラコルムに1260年以来設置されていた宣慰司都元帥府は、カラコルムの宣慰司と金山南の都元帥府に分離された。年次は1289年以前の段階というだけではっきりしない¹⁷⁾。また「金山の南」には都元帥府を設置するような都市は知られていない。当時、モンゴル高原の方位は、90度、実際の方位より時計回りに進めてさまざまな史料に記録されている¹⁸⁾。したがって、実際には「金山の東」というのが正しいとみることもできる。もしそうならば長春真人がチンカイの位置として旅行記に記録しているのとは一致し、この都元帥府が設置された場所は、チンカイ地区である可能性がでてくる。のち1307年、この方面の投降民激増に対応して、嶺北行省が設立される¹⁹⁾が、その下部機関として、チンカイ地区に、宣慰司都元帥府が設置されている。したがって、この1289年以前の都元帥府の設置場所がチンカイ地区である可能性はその点からも高くなる。

『大元倉庫記』納蘭不剌倉、至元26年〔1289〕12月20日の条に、「・・・迤北の孔居烈裏火阿塞、塔児海裏鎮海に住各（住冬？＝冬ごもり）する軍人及び和林（カラコルム）に糧を送る・・・」と記載されており、この記事そのものは難解であるが、この「鎮海」がチンカイを表しているとすれば、チンカイ地区で冬季滞在する軍隊への食糧補給が議論となっている。

しかし、都元帥府の設置など西への元朝の勢力拡大はそれほど長く維持されていなかったと思われる。上記の鎮海（チンカイ）の軍人などは実際その年（1289年）にはもう撤収していなくなっていたと思われる。同年、カイド軍は、ハンガイ山の北回りで²⁰⁾モンゴル高原深く侵攻し、首都カラコルムも攻撃を受け、宣慰使のケベクは逃亡して、カイド側に寝返り、カラコルム西のハンガイでもカイド側へ通じて叛乱する者が出て、各所で戦闘が起きた²¹⁾。同時期、クビライの王子カマラが（晋王としてモンゴル高原へ来るのはまだ先のこと）、ハンガイでカイド軍と戦っている。ヨブクルはこの時、カマラに投降したようではある²²⁾が、戦況は元朝側に不利であった。キプチャク軍団の長トクトガがカマラに従っていたが、苦戦を強いられ、カマラをかろうじて助けて難を逃れた²³⁾。1289年バヤン（知枢密院事）がカラコルムに派遣されて知（枢密）院が設置され、1290年にカラコルムに都元帥府が復活しており、元朝のモンゴル高原防衛は前年の戦いを契機にカラコルム中心に縮小した。

カイド側の攻勢は、90年も続き、カラコルム南のオングのシバウチの城、さらに東の大オールド（アウラガのチンギス・カンの大オールドを指すと思われる）までもが襲撃を受けている。大オールドは当時、ドルドカが居守し、ヤクドとともに守備していたが、カイド軍の侵入で撃破され、不思議嶺にいていたヤクドの妻や財産すべては、ヨブクル、メリク・テムルによって奪取されてしまった。ヤクドは北安王ノモガンの第2オールドに住むように命じられた²⁴⁾。この1290年にクビライ・カアンは、自らハンガイに遠征して、カイド軍を撃破している²⁵⁾。また1291年にトクトガは、カラチ軍団10,000人を率いて北方カンダガイに出猟し、その情報でカイド側は侵攻せず引き上げた。カラチ軍団の活動したカンダガイの場所は不明であるが、トクトガは、アルタイ方面を活動域としており、のちカラチ兵は元末にチンカイに居住しているので、あるいはカンダガイも西モンゴル地域の地であるかと推測される。

4. カマラ、テムル時代のモンゴル高原

1292年、カマラが晋王に封建され、モンゴル本土の王となった。その秋バヤンが攻勢に出て、カイド側のメリク・テムルの侵攻を迎え撃ち、敗走させ、ビゲル²⁶⁾で敵軍2,000余を殲滅して帰還し、メリク・テムルを一時投降させた²⁷⁾。また同じ秋、キプチャク軍団を率いるトクトガがアルタイ山方面まで進出して、カイド側の3,000戸（1万人以上の人口になろうか）を奪取して帰還、元朝勢力圏を西へ大きく盛り返した²⁸⁾。

元朝はこの状況を基盤として、クビライの孫で、チンキムの子のテムルが翌年1293年にアルタイ地区に出鎮して、西の防衛に当たった。バヤンはこの時、ウス・テムルと交代した。トクトガは、1293年春、カイド側の一角、イエニセイ河上流の氷結したケムケム河を進み、同地区の（益蘭州²⁹⁾などの）五部地区に侵出し、同地を奪還にきたカイド軍を撃退して、元朝勢力圏を北に拡大した³⁰⁾。

テムルは、1294年、クビライ死去を受けて、アルタイから大都へ戻って即位したが、トクトガはアルタイ地区の守備を続けた。こうした状況の下、1295年首都大都から六衛、つまり首都防衛部隊、の漢人1000兵が派遣され、再びチンカイが元側の農業基地として開発されることとなり、それと並行して1296年2月に農具が現地兵員に支給されている。

カイド側勢力の一角、アルタイのヨブクルは、1296年秋、ウルス・ブカなどを伴って元朝側に投降してきた。アルタイ辺境を守り続けてきたトクトガが彼らを迎えた。元朝側は、この投降を歓迎し、翌年春をもって年号を大徳に改元したほどであった。しかしこの投降によって元朝側の辺境防備に緩みが生まれ、翌1298年辺境防衛拠点はカイドの攻撃を受けて壊滅した。その立て直しのために諸王カイシャンがアルタイ辺境に派遣され、1304年に懷寧王に封建され、チンカイがその封地となった。カイシャンが率いた河南淮北蒙古軍の兵員はその地に出て以来チンカイを屯田地としていた。クビライ・カアン時代の終焉とともに西北モンゴリア地区は再び大農業基地としての開発が進み始めたのである。

次表は、上記のクビライ政権期のチンカイ地区をめぐる情勢とあわせてチンカイ屯田に関する元朝時代の記録を整理したものである。これらの記録からさらにチンカイ屯田の位置確認の作業を進めて行きたい。

注

- 1) 大葉昇一「モンゴル帝国＝元朝時代の称海屯田について」『史観』106, pp.82-95。
- 2) 拙稿「モンゴル帝国における工匠の確保と管理の諸相」『碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎的研究』（平成12～13年度科研費補助金基盤研究B)(1) 研究代表者 松田孝一）pp.178-180。
- 3) 村岡倫「モンゴル西部におけるチンギス・カンの軍事拠点－2001年チンカイ屯田調査報告をかねて－」『龍谷史壇』119・120, 2003, pp.1－61。
- 4) 『元史』134、也先不花伝に、「至元元年、以党附阿里不哥論罪伏誅」とあり、1264年にアリク・ブケ派の処断が決定されている。
- 5) 『元史』6、世祖本紀3に、「(至元2年正月癸酉) 勅徙鎮海、百八里、謙謙州諸色匠戸於中都。給銀萬五千兩為行費。」とある。
- 6) 『元史』5、世祖本紀2。
- 7) チャラク Charaqui はオッチギンの孫であることは、『集史』の当該箇所に記載がある (Boyle, J. A., The Successors of Genghis Khan, Columbia Univ. Press, New York & London, 1971,

p.266)。

- 8) 『元史』134 小雲石脱忽憐伝に、「(八丹) 後以鷹房萬戸從裕宗北征、至鎮海你里温、賜銀椅及び、鈔一萬五千貫」とある。鎮海に至ったことが記されている。你里温とは、「背骨」、「山脈」を表すモンゴル語 niru γ un のことか。「チンカイ你里温」はチンカイ嶺とでも訳すべきなのか。cf.『元史』「薛裏温你里温」「牙不罕你里温」などの地名の例がある。後者の牙不罕は西モンゴルのザブハンと音が通じる。
- 9) 『集史』Boyle, op.cit., pp.266.
- 10) 『元史』7、世祖本紀4、至元7年6月丁亥の条。
- 11) 村岡倫・松田孝一「宣威軍城址」森安孝夫・オチル(編)『モンゴル国現存遺跡・碑文調査研究報告』1999, pp.261-262, 村岡倫「宣威軍碑」同書 pp.263 - 265.
- 12) 拙稿「メリク・テムルとその勢力」『内陸アジア史研究』4, 1988, pp.91 - 102.
- 13) 『元史』117, 牙忽都伝。
- 14) 『元史』132, 玉哇失伝。
- 15) 拙稿「ユブクル等の元朝投降」『立命館史学』4, 1983, pp.28-62.
- 16) 『元史』128, 土土哈伝。
- 17) 『元史』58, 地理志、嶺北等处行中書省の条。
- 18) 理由としては、方位の表示用語が西モンゴルでは90度ずれて使用されているのが参考になろう Rintchen, B.(ed.), Atlas ethnologique et linguistique de la République Populaire de Mongolie. Oulan-Bator, 1979. 大葉昇一「元朝、イル・ハン国の文献にみる時計回り方位九〇度のずれについて」『史観』137, 1997, pp.22.
- 19) 拙稿「中国交通史—元時代の交通と南北物流—」『東アジア経済史の諸問題』2000, p.155.
- 20) 1289年のカイドの侵攻の報告は北安王ノモガンからカラコルムへ伝えられた(『元史』169, 劉哈刺八都魯伝)。ノモガンはタミル河に駐屯していたから、カラコルムの西北側、かつて長春真人が西征中のチンギス・カンのところへ旅行した往路の駅伝コースの逆を経て、カイドは侵入したのであろう。報告を受けた怯伯(ケベク)は南に逃亡した後、カイド側に寝返っている(同上)。
- 21) 1289年5月にはカイド側が侵入し、東モンゴルの守備していたキプチャク人のバイ・テムルが急行して、ケルレン河で、バヤウトの叛乱に遭遇し、捕虜を獲て帰還している(『元史』131, 伯帖木児伝)。同年12月には、ベクリンが叛乱して、駅官らを劫略した(おそらくハミの北)ので、ビシュバリク方面でカイドと戦っていたカンクリ族のミンガン(貴赤親軍都指揮司ダルガチ)が急行して撃破し、駅官らを奪回して、ついでカンガイに転戦してその地の叛乱者が駅伝を強奪し、駅官を拉致したので、これを撃破した(『元史』135, 明安伝)。別の記録では、バイダルという後衛親軍都指揮使兼領阿速軍(同時に阿速拔都ダルガチ[アス軍の先鋒部隊長官?])がハンガイで敵軍と戦い、食糧不足に陥ったことの記録があり(『元史』132, 杭忽思伝)、元朝軍は苦戦を強いられていたことが窺われる。
- 22) 『元史』115, 顕宗伝。「至元中、奉旨鎮北辺、叛王岳木忽児等聞其至、望風請降。」とある。この記事は、カマラが晋王に封建される1292年より前、1289年より以前の記事として見える。
- 23) 『元史』128, 土土哈伝。
- 24) 『元史』117, 牙忽都伝。
- 25) 『元史』119, 博爾忽伝に「帝討叛者于杭海」とあり、また姚燧『牧庵集』13, 高昌忠惠王神道碑銘并序に「二十七年、叛王罕都犯西北鄙。帝又自将往征至杭海、王累戰皆捷。叛王遠遁。撫安辺兵、

與置駅伝而還。」とある。

26) 東経 97 度 11 分、北緯 45 度 42 分、ゴビアルタイ郡の地名。2004 年に村岡倫、松川節、白石典之各氏とともに同地を現地調査した。

27) 『元史』127, 伯顔伝。

28) 『元史』128, 土土哈伝。トクトガのアルタイ遠征に従軍したキプチャク衛百戸キタイの記事も残されている（『元史』135, 乞台伝）。

29) 『元史』167, 劉好礼伝。『元史』63, 西北地附録に見える、キルギス、カプカナス、ケムケムジュート、益蘭州等所を指すと思われる。

30) 『元史』128, 土土哈伝。

モンゴル時代チンカイ・バルガスン（称海城）地区屯田年表

松田孝一（大阪国際大学）

1) 前期 チンギスカン政権時代の建設からクビライ政権成立に伴う廃止・空白期

年	月	日	記 事
1212			チンカイ（人名）、チンギス・カンの命を受けて、アルタイ方面の阿魯歡（兀里羊歡とも記載）の地（位置不明）に屯田と都市建設（『元史』120, 鎮海伝, /『圭塘小稿』10, 元右丞相怯烈公神道碑）
1265	01	癸酉	クビライが中国で即位、政権樹立。モンゴル高原のチンカイ、パイパルク、ケムケムジュート3地区居住の諸種工芸職人戸を新首都中都（現北京）へ移住させる。移住費用として銀1万5千兩を給与（3都市位置関係からチンカイはモンゴリア西部の最大都市）（『元史』6世祖本紀）
1270	秋		クビライの皇太子の裕宗（チンキム）はクビライの命を受けて、チンカイ地方を巡撫し、冬になって首都へ帰還。（『元史』115 裕宗伝）。セヴィンチ・トオリルの子八丹は裕宗に従いチンカイへ（ノモガンの西方進出の見送り）（『元史』134 小云石脱忽憐伝）

2) 中期 辺境屯田としての機能不明時期

1284	06	甲子	モンゴル高原の中心地であった首都カラコルム駐屯の1000人を五（条）河で屯田させる（『元史』13, 世祖本紀10, 『元史』100. 兵志3 屯田、嶺北行省）
1285	01	戊子	五条河屯田軍を兀失蛮、扎失蛮に移動（『元史』13 世祖本紀10）
			カラコルム屯田を五条河に合併（『元史』58, 志10, 地理1）
1289			中央アジアの反元朝勢力カイドウの侵攻
	12	20	チンカイ兵士への食糧供給関連記事（『大元倉庫記』納蘭不刺倉）

3) 後期 屯田発展期

1293			テムルのアルタイ出鎮
1294			テムル即位
1295			元朝首都から六衛の漢軍1000名をチンカイに派遣、屯田（『元史』58, 地理志1, 『元史』100. 兵志3 屯田、嶺北）
1296	秋		中央アジアの反元朝勢力ヨブクルらアルタイ（金山の玉龍海または玉龍罕）で投降（第1次投降）投降民への食糧供給用に辺境屯田推進へ
	02	己亥	チンカイの屯田兵士に農具を給付（『元史』19 成宗本紀2）
1297	01	己丑	カラコルムの漢軍の一部を五条河で屯田、毎年納入される租税米を投降民へ供給（『元史』19, 成宗本紀2）
	03	庚寅	チンカイの職人に農具購入金22900余錠を給与（『元史』19, 成宗本紀2）
1298	01		チンカイで4～5年対陣消耗した漢人、女直、高麗等の兵2136名と中国からの2200名が交代⇒消耗兵士は1295年派遣屯田兵を指す（『元史』99, 兵志2, 鎮戍）
	秋		元朝のアルタイ方面辺境防衛軍の綱紀が弛緩し、冬、カイド軍の侵攻を受け、全軍壊滅（『集史』テムル（成宗）紀他）
1299			王子カイシャンを辺境軍再建のため派遣。配下の河南モンゴル軍がチンカイで屯田（『元史』22 武宗本紀1, 『山右石刻叢編』37, 忽神公神道碑銘并序）
			五条河の漢軍をすべてあわせてチンカイに入れる（『元史』100. 兵3 屯田、嶺北）
1300	02	戊午	チンカイ屯田を廃止し、改めてカジャ（呵札）の地に（屯田）を置き、農具、種実を給付する（『元史』20 成宗本紀）
1301	05		チンカイの倉庫関係記事（『大元倉庫記』）
	07	癸亥	チンカイから北境までの12駅で、大雪のため馬牛が多く死に、このために鈔1万1千余錠を給与（『元史』20, 成宗本紀3）
	08		元朝軍は、アルタイ越えて侵攻のカイド、ドアとザブハン河のテゲリクで会戦。元軍壊滅、カラコルム官僚、倉庫焼却し逃亡。カイドも戦傷し、引き上げ後死去（『集史』オゴデイ・カンテムル・カン紀：Boyle., op. cit. p.24, 『元史』132, 玉哇失128, 土土哈伝）
	09	癸丑	チンカイ倉庫守備隊を中国に帰還、以後交代制（『元史』20, 成宗本紀3）
1302	09	乙未	チンカイ屯田の歳入額の会計監査実施（『元史』20 成宗本紀3）
1306			アルタイ方面元朝敵対勢力2次投降（『元史』119, 博爾忽伝）

年	月	日	記 事
1307	07	癸酉	投降民激増でモンゴル高原行政事務増大。行政機関「嶺北行省」設立。下部機関チンカイ宣慰司・都元帥府・カラコルム総管府設置。チンカイは首府カラコルムに次ぐ、モンゴリア西部最大拠点（『元史』22, 武宗本紀1）
1308			チンカイ屯田が廃れ、再建。年20余万石の収穫。以前の灌漑施設を再整備、溉田数千頃（『元史』136, 哈刺哈孫伝、『元文類』25, 丞相順徳忠献王碑） ⇔ 1323年記事の面積と比較せよ
1310	07	庚寅	チンカイのイエケ・ジャルグチ（大断事官）を廃止し、ヨブクルは通例に従い、王府官6員を設置することを要望し、承認。アルタイ方面玉龍罕のヨブクルの領地がチンカイに近いことを示す（『元史』23, 武宗2）
1311	05	丁巳	嶺北行省右丞ボリとマスードがチンカイ屯田監査（『元史』24, 仁宗本紀1）
1312	01	丁卯	チンカイ屯田の漢軍を救済（『元史』24, 仁宗本紀1）
	02	丙子	チンカイ屯田に牛2000頭を給付（『元史』24, 仁宗本紀1）
1314	04	丁亥	チンカイと五河屯田に粟を備蓄（『元史』25, 仁宗本紀2）
1316			チンカイ屯田を廃止し、五条河屯田を再設置（『元史』100, 兵3屯田, 嶺北）
1319			モンゴル兵5000人を選抜してチンカイに再屯田（『元史』100, 兵3屯田, 嶺北）
	11	庚子	晋王の貧民2000人をチンカイに屯田させる（『元史』26, 仁宗本紀3）
1320	05	己丑	クビライの旧制に従い、チンカイ・五条河両地に屯田設置。兵1000人を五条河で屯田させる（『元史』100, 兵3屯田, 嶺北、『元史』27 英宗本紀1）
1323	02	辛卯	チンカイ宣慰司と万戸府廃止、屯田総管府を設置。（嶺北行省）屯田万戸府を設置（『元史』28, 英宗本紀2）。モンゴル高原の屯田統計は戸数で4648戸、面積で6400頃（約360 km ² ）（『元史』100, 兵志3屯田, 嶺北）
1324 年より 以前			張士傑なる人物は、チンカイ宣慰使司都元帥府経歴に任じられ、戍兵の多くが郷里の人々が貧乏で帰還がままならないのを援助して帰した（許有壬『至正集』57、「贈通議大夫大都路都総管上軽車都尉清河郡侯諡莊惠張公神道碑銘并序」）
元末			諸王アルフイ・テムル（オゴデイ家のメリクの子孫、アルタイを領地とする）懲罰に派遣の元朝トゴン・テムル、チンカイでカラチ1万人を徴兵。兵士訓練なく戦場で逃亡（『元史』206, 叛臣伝, 阿魯輝帖木兒）